

令和 2 (2020) 年度
福山大学 全学外部評価
報告書

福山大学
全学自己点検評価委員会

令和 3 (2021) 年 3 月 31 日

目 次

はじめに	1
第1部 福山大学2019年度自己点検評価について	
第1章 福山大学の概略	2
(1) 福山大学の沿革	2
(2) 福山大学の教学組織	2
(3) 福山大学の施設・設備	3
第2章 全学外部評価の実施について	4
(1) 全学外部評価を実施する経緯と目的	4
(2) 全学外部評価の実施方針	5
(3) 全学外部評価委員会の組織	5
第3章 福山大学自己点検・評価について	6
(1) 福山大学自己点検・評価実施の組織と実施方法	6
(2) 福山大学自己点検評価の実施結果の評価方法	7
(3) 令和元（2019）年度の自己点検・評価の実施と日程	7
第4章 令和元（2019）年度自己点検・評価の結果	8
(1) 使命・目的等	8
(2) 学生	10
(3) 教育課程	15
(4) 教員・職員	18
(5) 経営・管理および財務	21
(6) 内部質保証	21
(7) 福山大学ブランディング戦略	24
(8) 令和元（2019）年度 「理事長、学長への提言」	26
(9) 平成30（2018）年度「理事長・学長への提言」に対する改善報告	27
第2部 2020年度全学外部評価委員会の実施について	
(1) 委員長挨拶（井内委員長）	30
(2) 福山大学の基本理念と概況 大学改革の取組とその成果（松田学長）	31
(3) 福山大学の自己点検評価活動について（坂口実施小委員会委員長）	34
(4) 外部評価委員会での福山大学に対する感想・意見・提言	36

(5) 外部評価員からいただいた意見、提言の要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

第3部 資料集 (別途、データを配布)

- 資料 1 学生便覧 2020 (別冊子)
- 資料 2 福山大学の諸委員会一覧
- 資料 3 福山大学自己点検評価規程
- 資料 4 令和元 (2019) 年度福山大学経済学部 外部評価報告書
- 資料 5 令和元 (2019) 年度点検評価項目一覧
- 資料 6 福山大学全学自己点検評価回答用紙書式
- 資料 7 令和元 (2019) 年度 学部等自己点検・評価結果一覧
- 資料 8 福山大学オープンキャンパス参加状況 (2015年～2019年)
- 資料 9 志願者数、合格者数及び入学者数 (2017年～2019年)
- 資料 10 資格取得支援状況とその取得状況
- 資料 11 奨学金受給状況 (2017年度～2019年度)
- 資料 12 福山大学学友会サークルと活動状況一覧
- 資料 13 福山大学 安全衛生管理の手引き
- 資料 14 福山大学 危機管理基本マニュアル (第1版)
- 資料 15 福山大学 自然災害対応マニュアル
- 資料 16 2019年度アセスメント集計結果 (学科別)
- 資料 17 共同利用センター管理機器一覧
- 資料 18 外部研究資金獲得状況
- 資料 19 令和元年度 学校法人福山大学 財務状況

はじめに

福山大学は、人文社会系、理工系、医療系の 5 学部 14 学科、大学院 4 研究科 11 専攻を擁する総合大学です。本学創設者 宮地 茂 初代学長が唱えた建学の理念「地域社会に広く開かれた大学として、学問のみに偏重するのではなく、真理を愛し、道理を実践する知行合一の教育によって、人間性を尊重し、調和的な人格陶冶を目指す全人教育」を礎として教育を行っています。この建学の理念は、激動する現代にあっても古びるどころか、むしろ今日の大学に求められている学士力そのものであると言えるでしょう。他方、社会構造の著しい変化に対応すべく、具体的な教育の目標の設定、目標達成のための教育システムには不断の革新が必要です。本学は開学 40 周年を機に、「教育理念と教育目的」を時代に即したものへ改訂し、各学部・学科がディプロマ・ポリシーを定め、その実現に向けてカリキュラム・ポリシーを定め、「人間関係をつくりながら学ぶ目標設定型の教育システム」を稼働させています。これらの教育改革は、自己点検・評価に基づく全学的な取組の成果です。

文部科学省の高等教育政策は「高等教育計画の策定と各種規制」から「将来像の提示と政策誘導」に移行しており、自律的・主体的な自己点検・評価による教育の改善、改革を大学に促しています。文部科学省 中央教育審議会の答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（第 211 号、平成 30 年 11 月）」では、2040 年には出生数が 74 万人程度と推定される人口減少社会の中での大学の在り方を示しています。高等教育は「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」＝「多様な価値観が集まるキャンパス」になることが必要であり、私立大学の役割は、教育研究の多様性によって複雑な社会の変化に対応できる国民を育成し、一人ひとりの労働生産性を大幅に引き上げるため、幅広い年齢層に及ぶ中核的人材の教育機会を保障し、国民の知的水準を底上げすることであると示されています。「何を学び、身に付けることができたのか」、「学んでいる学生は成長しているのか」、「大学の個性が發揮できる多様で魅力的な教員組織、教育課程があるか」を確認する「大学教育の質保証システムへの転換」が必要であり、「教育の質を保証できない機関は、社会から厳しい評価を受けることとなり、その結果として撤退する事態に至ることがあり得ることを覚悟しなければならない。」と断じています。

本学では教育の質保証に向け、自主的な自己点検・評価活動に取組んできました。また、外部の公的評価機関による認証評価については、平成 29（2017）年度に公益財団法人 日本高等教育評価機構による認証評価を受審し、同機構の大学基準に適合と認証されています。また、自律的な自己点検・評価を毎年実施することに加えて、地域の行政・教育・産業など各界の有識者からご助言をいただくことを目的とした外部評価も 7 年に一度実施しています。今年度はその外部評価を評価員の皆様にお願いしております。忌憚のないご意見をいただき、今後の大学運営に生かしていきたいと思います。

福山大学 学長 松田 文子

第1章 福山大学の概略

(1) 福山大学の沿革

福山大学は昭和 50 (1975) 年 4 月に、故 宮地 茂により創設された。創設者 宮地 茂は文部省(現 文部科学省)で長らく教育行政に携わる中で、既存の大学の在り方に疑問を抱くことが少なくなかった。「大学の価値を入学試験の難易度で示すのではなく、どのような教育を行うかによって評価すべきである。学間にのみ偏重するのではなく、真理を愛し、道理を実践する知行合一の教育によって、人間性を尊重した調和的な人格陶冶を目指す全人教育が必要である」と考えた。当時、広島県東部には 4 年制大学がなく、若者は遠くの大学を選択せざるを得なかった。文部省を退官した宮地は、大学の新しい価値体系を真摯に追求し、自らの理想を故郷の福山で実現するために、新しい大学創設に東奔西走した。福山大学はこのような創設者の熱い思いにより、福山の地に誕生したのである。「未来を志向する無垢な若者に明日への希望を託し、明るい将来の礎を築きたい」という創設者の情熱は、現在も教職員に脈々と受け継がれている。福山大学の建学の精神、教育理念・教育目的を資料 1 「学生便覧 2020」の 2 頁に、沿革を 7~9 頁に記載している。

(2) 福山大学の教学組織

経済学部 経済学科、工学部 電子・電気工学科及び土木工学科の 2 学部 3 学科からスタートした本学は、創設以来 45 年の月日を経て、資料 1 「学生便覧 2020」の 10 頁に示すように 5 学部 14 学科、大学院 4 研究科を擁する総合大学に発展している。学部の入学定員は 5 学部 14 学科全体で 970 人、収容定員は 4,180 人である。大学院 (修士課程) 全研究科の入学定員は 35 人、収容定員は 70 人である。大学院 (博士課程) 全研究科の入学定員は 14 人、収容定員は 45 人である (表 1)。

表 1 学部、学科、研究科 入学定員及び収容定員 (単位 : 人)

学 部	学 科	入 学 定 員	収 容 定 員
経済学部	経済学科	170	680
	国際経済学科	50	200
	税務会計学科	50	200
	学部小計	270	1,080
人間文化学部	人間文化学科	50	200
	心理学科	50	200
	メデイア・映像学科	50	200
	学部小計	150	600
工学部	スマートシステム学科	30	120
	建築学科	70	280
	情報工学科	50	200
	機械システム工学科	50	200
	学部小計	200	800
生命工学部	生物工学科	50	200
	生命栄養科学科	50	200
	海洋生物科学科	100	400
	学部小計	200	800
薬学部	薬学科	150	900
全学部	合 計	970	4,180
研究科	専 攻	入 学 定 員	収 容 定 員
経済学研究科 (修士課程)	経済学専攻	8	16
人間科学研究科 (修士課程)	心理臨床学専攻	10	20
工学研究科 (修士課程)	電子・電気工学専攻	2	4
	建築学専攻	3	6
	情報処理工学専攻	2	4
	機械工学専攻	2	4
	生命工学専攻	8	16
	研究科小計	17	34
	電子情報工学専攻	2	6
工学研究科 (博士課程)	地域空間工学専攻	3	9
	設計生産工学専攻	2	6
	生命工学専攻	4	12
	研究科小計	11	33
薬学研究科	医療薬学専攻	3	12
全研究科	合 計	49	115

教学組織は、各学部に学部教授会を置き、単位認定、進級、卒業、退学などの審議、カリキュラム変更、共同研究の実施などを審議している。また、大学院には研究科委員会を置き学部教授会と同様に審議している。さらに、助教以上の全教員を構成員とする全学教授会を置き、入学試験の合否判定、進級・卒業の最終判定など全学的事項について審議している。全学的重要事項については、学長、副学長、学長補佐、各学部長、各研究科長、各研究センター長、図書館長、教務委員長、学生委員長、及び事務局長、各事務部長等を構成員とする評議会で審議し、学長を中心とするガバナンスにより大学を運営している。学長を補佐するために、副学長2人、学長補佐5人及び事務局長を構成員とする学長室会議を置いている。

令和2（2020）年5月1日現在の専任教員数は194人、助手は24人で、表2に示すように各学部、学科、センター等に配置し、大学設置基準に定められた教員数及び教授数を満たしている。大学院担当教員は学部教員と兼任しており、大学院設置基準を満たしている（データ省略）。また、令和2（2020）年4月1日現在の職員数は71人である。福山大学では教職協働を推進しており、教職員は資料2「福山大学 諸委員会一覧」に示す諸委員会に所属して、大学運営に参画している。

（3）福山大学の施設・設備

広大な福山大学キャンパスには32棟に及ぶ講義棟、研究棟等が建ち並び、学生、教職員が活発な教育・研究を行っている。また、野球場、サッカー場、多目的グラウンド、テニスコート、弓道

表2 全学の教員組織(学部) (2020.4.1現在)

(単位:人)

学 部	学 科	専任教員数					助手	設置基準上 必要専任教 員数	設置基準上 必要専任教 授数
		教 授	准教授	講 師	助 教	小 計			
経済学部	経済学科	6	2	5	1	14	0	11	6
	国際経済学科	4	4	1	0	9	0	8	4
	税務会計学科	4	0	2	2	8	0	8	4
	学部小計	14	6	8	3	31	0	27	14
人間文化学部	人間文化学科	4	4	0	0	8	0	6	3
	心理学科	5	3	4	1	13	2	6	3
	メディア・映像学科	4	2	1	0	7	0	7	4
	学部小計	13	9	5	1	28	2	19	10
工 学 部	スマートシステム学科	4	5	0	0	9	1	8	4
	建築学科	7	3	0	1	11	0	8	4
	情報工学科	4	3	1	1	9	0	8	4
	機械システム工学科	5	2	1	0	8	1	8	4
	学部小計	20	13	2	2	37	2	32	16
生命工学部	生物工学科	9	2	0	0	11	1	8	4
	生命栄養科学科	5	4	1	1	11	5	8	4
	海洋生物科学科	8	3	3	0	14	4	9	5
	学部小計	22	9	4	1	36	10	25	13
薬 学 部	薬 学 科	24	11	6	2	43	9	31	16
全 学 部 小 計		93	48	25	9	175	23	134	69
センター等	大学教育センター	4	3	4	2	13	1	—	—
	国際センター	0	1	0	0	1	0	—	—
	共同利用センター	1	0	1	1	3	0	—	—
	IR室	0	0	0	1	1	0	—	—
	社会連携センター	0	0	0	1	1	0	—	—
	センター等小計	5	4	5	5	19	1	—	—
合 计		98	52	30	14	194	24	172	88

場、体育館、武道館などのスポーツ施設を整備している。校地、校舎面積は表3に示すように大学設置基準を満たしている。大学創立から45年を経て老朽化した校舎を順次建て替えており、2013年度には工学部棟を新築、2021年3月には、地上11階建ての未来創造館を竣工した。未来創造館は4階～10階部分を薬学部棟として整備する一方、1階から3階は全学共用施設としてプレゼンテーションギャラリー、セルフスタディーコーナー、オープンコミュニケーションエリア、インフォメーションダイナー、自分未来活動エリアなどを設けて学生の利便性を確保している。また、最上階の11階には、松永湾を展望できるカフェテリアと本格的な茶室を設けている。

表3 福山大学の校地、校舎の面積

	区分	専用 (m ²)	共用 (m ²)	共用する他の学校等の専用 (m ²)	計 (m ²)	設置基準上必要な面積 (m ²)
校地等	校舎敷地	139,650.27	991.00	0.00	140,641.27	45,320
	運動場用地	61,833.76	0.00	0.00	61,833.76	
	小 計	201,484.03	991.00	0.00	202,475.03	
	その他	52,758.96	0.00	0.00	52,758.96	
	合 計	254,242.99	991.00	0.00	255,233.99	
校 舎	108,679.07	5,931.61	0.00	114,610.68	37,485	

第2章 全学外部評価の実施について

(1) 全学外部評価を実施する経緯と目的

平成16(2004)年度から、全ての大学は7年以内ごとに文部科学大臣が認証する評価機関の評価を受けることが義務付けられている。福山大学は、第1回目の機関別認証評価を平成18(2006)年度に受審し、評価機関の一つである公益財団法人 大学基準協会より適合と評価された。しかし、平成25(2013)年度の第2回目の機関別認証評価では不適合と評価された。その理由として、必要な専任教員数等の不足、及び収容定員に対する在籍学生数比率が大学全体で未充足であったことが指摘された。本学はこの判定を忸怩たる思いで受け止め、指摘事項の改善に努めるとともに、このような評価を再び受けることが無いように、平成26(2014)年4月に福山大学自己点検評価規程(以下、自己点検評価規程)を制定して、自己点検・評価を行う組織、任務及び運営するシステムを構築した(資料3)。自己点検評価規程では、全学自己点検・評価委員会が機関別認証評価受審に対応することを定めるとともに、各学部等に設けた学部等自己点検評価委員会が独自の点検項目についてそれぞれの学部等の単位で自己点検評価を隔年に実施することを定めている。さらに、毎年1学部と全学が順に外部評価を受けることを定めている。

本学は自己点検評価規程に従い自己点検・評価活動を行い、問題点の改善に努めた結果、平成28(2016)年度に評価機関の一つである公益財団法人 日本高等教育評価機構より適合と評価された。この度の全学外部評価は、本学が自律的、主体的に取組む自己点検・評価活動の一環として、教育、研究、地域貢献、社会活動等への学外からの期待や要望に本学が耳を傾け、それらを大学の中

長期的計画策定や教育・研究活動の改善に資することを目的として実施する。

(2) 全学外部評価の実施方針

学部等の外部評価はすでに平成 28（2016）年度までに 5 つの学部が実施しており、令和元（2019）年度から第 2 回目の学部外部評価を実施しているが、全学の外部評価は今回が初めての実施となる。評価機関による機関別認証評価では、点検・評価項目のそれぞれに評価基準が設けられており、対象大学の現状が評価される。本学が独自に実施する全学外部評価では、今後の発展に向けた方策を提言することを志向している。今回の全学外部評価では、外部評価委員会で評価員に委嘱した学外の有識者から本学の教育、研究、地域貢献、社会活動等に対して活発にご意見をいただき、要約してまとめる予定である。

評価委員会の資料となる本書は次の構成である。第 1 部の第 1 章では、本学の概略説明。第 2 章は全学外部評価実施の説明、第 3 章は、本学が独自に毎年実施している自己点検・評価について、第 4 章は令和元（2019）年度自己点検・評価の結果を記載している。第 2 部では令和 2（2020）年 11 月 27 日に開催された外部評価委員会の議事録とその要約、そして第 3 部では、本書に関連する資料等を補足したものである。全学外部評価を実施全学外部評価委員会の構成員として、自己点検評価規程第 18 条では、他大学及び教育・研究機関の者 3 名、企業及びそれらの関係団体等の者 2 名、認証評価機関の評価員経験者 1 名、全学委員会から学長の指名する者 3 名を組織する、と規定している。しかし、認証評価機関の評価員は公表されていないため委嘱が困難であること、本学の全学委員会から 3 名を選出することは、外部評価の主旨と一致しないことから、今回は地域の 6 人の各界有識者に評価員を委嘱した。

(3) 全学外部評価委員会の組織

表 4 に示すように、地域の行政、教育、産業の各界の 6 人に評価員を委嘱し全学外部評価委員会を組織した。全学外部評価委員会には、評価員からの質問への回答や評価員とのディスカッションのため、学長、副学長、学長補佐、学部長、研究科長等協議会議長、教務委員長、学生委員長、及び事務局長の 15 名が出席する（表 5）。全学外部評価のための資料等は、福山大学全学自己点検評価委員会の実施小委員会が準備し、外部評価委員会において評価員からいただく意見等を集約して全学外部評価書（案）を作成し、評価員による点検を経て 2021 年 3 月に公表する予定である。

表4 評価委員会(敬称略)

評価員	役職等
井内 康輝	・ひろしま病理診断クリニック院長 ・広島市教育委員会委員 ・元広島大学医学部長
佐藤 元彦	・福山市教育員会教育次長
小葉竹 靖	・福山市市民局 局長
古前 勝教	・広島県立府中高等学校 校長 ・広島県公立高等学校長協会 副会長
柿原 博樹	・(有)柿原銘板製作所 代表取締役 ・福山商工会議所 副会頭 ・福山市教育委員会 委員
木下 博雄	・三和製作株式会社 代表取締役 社長 ・福山商工会議所 議員

表5 福山大学 出席者

氏名	役職等	所属学科・職位
松田 文子	学長、全学自己点検評価委員会 委員長	心理学科・教授
大塚 豊	副学長（教学担当）、大学教育センター長	大学教育センター・教授
富士 彰夫	副学長（涉外担当）、経済学部長	国際経済学科・教授
鶴田 泰人	学長補佐（教学担当）、薬学部長	薬学科・教授
山本 覚	学長補佐（自己点検評価担当）、生命工学部長	生物工学科・教授
平 伸二	学長補佐（総務担当）、人間科学研究科長	心理学科・教授
仲嶋 一	学長補佐（研究担当）、スマートシステム学科長	スマートシステム学科・教授
佐藤 圭一	学長補佐（入試担当）、入試委員会 委員長	建築学科・教授
山之上 順	工学部長	情報工学科・教授
田中 始男	人間文化学部長	メディア・映像学科・教授
加藤 昌彦	研究科長等協議会 議長	機械システム工学科・教授
満谷 淳	教務委員会 委員長	海洋生物科学科・教授
田中 哲郎	学生委員会 委員長	薬学科・教授
坂口 勝次	自己点検評価実施小委員会 委員長	機械システム工学科・教授
吉留 義史	事務局長	事務局長

庶務担当

氏名	役職等
武田 康成	福山大学事務局 総務部長
小林 圭二郎	福山大学事務局 総務部 企画・文書課長

第3章 福山大学自己点検・評価について

(1) 福山大学自己点検・評価実施の組織と実施方法

本学では、自己点検評価規程に基づき、本学独自の自己点検・評価を毎年実施している。この自己点検・評価は全学自己点検評価委員会（委員長：学長）が主導し、経済学部・経済学研究科、人間文化学部・人間科学研究科、工学部・工学研究科（生命工学専攻を除く）、生命工学部・工学研究科生命工学専攻、薬学部・薬学研究科、図書館、大学教育センター、国際センター、共同利用センター、内海生物資源研究所、備後圏域経済・文化研究センター、安全安心防災教育研究センター、グリーンサイエンス研究センター、社会連携センター、資格取得支援センター、保健管理センター、研究推進委員会、入試委員会、教務委員会、学生委員会、就職委員会、キャリア形成支援委員会、及び広報委員会の25部署に13学科を加えた38部署で、それぞれの部署に設置した学部等自己点検・評価委員会が自己点検・評価書を作成した。令和元（2019）年度の点検項目は、評価機構の大学評価基準を基にして資料5「令和元（2019）年度学部等自己点検・評価項目」に示すように、6基準70項目を点検項目策定小委員会が設定している。また、全学統一の回答書式を定めている（資料6）。

各学部等自己点検・評価委員会は、年度初めに点検項目に基づき現状説明と年度計画を策定して自己点検評価実施小委員会（以下「実施小委員会」）に提出している。実施小委員会は回答内容を点

検している。年度末に、各学部等自己点検・評価委員会は年度初めに設定した年度計画に対する達成状況を説明し、S、A、B、C の 4 段階で自己評価している。これを実施小委員会が再度点検している。点検の基準は、①点検項目の主旨に沿った内容であるか、②大学全体の理念、目的、目標に沿った内容であるか、③実現の可能性はあるか、④継続性（連續性）はあるか、の 4 点としている。

（2）福山大学自己点検評価の実施結果の評価方法

達成度評価は S、A、B 及び C の 4 段階評価とし、その評価基準は次のように規定している。

S；年度目標、方針に基づいた活動が行われ、達成度が極めて高い

A；概ね、年度目標、方針に基づいた活動が行われ、ほぼ達成されている

B；年度目標、方針に基づいた活動や、達成度がやや不十分

C；年度目標、方針に基づいた活動や、達成度が不十分で改善すべき点が多い

また、S、A、B 及び C の達成度評価を数値化するため、S→4、A→3、B→2 及び C→1 の数値を割り当て、達成度の数値評価を行い、2.5 を標準値とした。これらの評価から、年度毎の達成度変化、及び標準値や全学平均値との比較から、PDCA サイクルの円滑な稼働が行われているかどうかを点検している。

（3）令和元（2019）年度の自己点検・評価の実施と日程

令和元（2019）年度の自己点検・評価活動は以下の日程で実施した。

- ・自己点検・評価書（書式）配布：・・・・・・・・・・・・平成 31（2019）年 2月
- ・自己点検・評価書（計画編）提出：・・・・・・・・・・・・平成 31（2019）年 4月
- ・自己点検・評価書（計画編）点検終了返却：・・・・・・・・令和元（2019）年 5月
- ・自己点検・評価書（計画編）意見交換面談：・・・・・・・・令和元（2019）年 8月
- ・自己点検・評価書（計画編）の改革推進委員会への実施報告：令和元（2019）年 9月
- ・自己点検・評価書（報告編）提出：・・・・・・・・令和 2（2020）年 3月
- ・自己点検・評価書（報告編）点検終了・返却：・・・・・・・・令和 2（2020）年 6月
- ・自己点検・評価書の全学委員会での審議：・・・・・・・・令和 2（2020）年 8月
- ・自己点検・評価書の改革推進委員会・評議会での審議：・・・・令和 2（2020）年 10月

第4章 令和元（2019）年度自己点検・評価の結果

令和元（2019）年度の自己点検評価活動は、6基準70項目にわたる細点検項目について学部等委員会が自己点検・評価をそれぞれ実施して、自己点検・評価書を作成した。全学委員会では、これら報告書に記載された達成度評価を基に、令和元（2019）年度の本学における教育活動等を点検した。個々の学部等の自己点検・評価書は、大学ホームページで公表しているので、参照していただきたい。（URL：<https://www.fukuyama-u.ac.jp/disclosure/self-evaluation/>）各学部等の達成度評価一覧を本報告書に資料7「令和元（2019）年度 学部等自己点検・評価結果一覧」として添付した

（1）使命・目的等

本学では、福山大学学則（以下「学則」という。）、各学部規則及び各研究科規則に、大学、学部・学科及び大学院研究科の使命・目的、教育目的をそれぞれ定めている。資料1「学生便覧2020」に全学の使命・目的等を258頁に、経済学部は273頁に、人間文化学部は275頁に、工学部は277頁に、生命工学部は280頁に、薬学部は282頁に、そして大学院は295頁に記載している。

大点検項目の「基準1. 使命・目的等」として、学部等の使命・目的及び教育目的の設定と反映について点検した。この評価基準における2つの中点検項目（8つの細点検項目）に関する達成度分布を図1に示す。

基準1に関して、大学全体の達成度は、S評価が40.4%、A評価が56.6%、合わせて97.0%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、A評価の割合が微減し、S評価の割合が微増しており、年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善が認められる。以下に基準1の各中点検項目について概説する。

【基準1-1】「大学、学部、学科、研究センター及び委員会等は、それぞれの使命・目的および教育目的を設定していますか。」

この中点検項目に関する達成度分布を図1-1に示す。使命・目的等の意味・内容の具体性や明確性、個性や特色、社会の要請や背景の変化への対応について、S評価が44.7%、A評価が52.6%、合わせて97.3%を占め、全体の達成度は極めて高い。昨年度の結果と比較すると、A評価の割合が微減し、S評価の割合が微増しており、基準1-1「使命・目的等の設定」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。

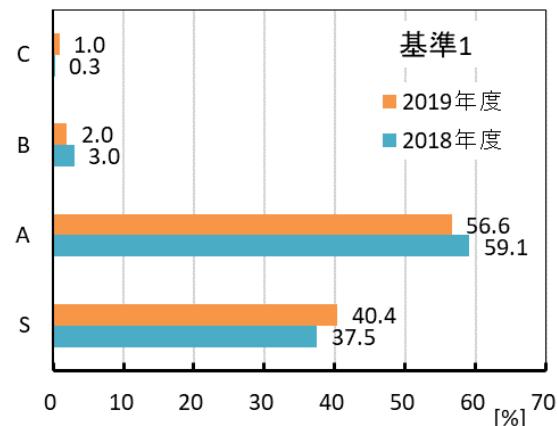


図1 「使命・目的等」に関する全細点検項目に対する達成度分布

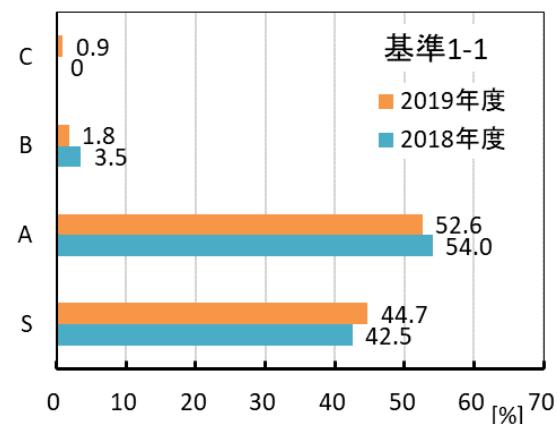


図1-1 「使命・目的等の設定」に関する達成度分布

教育目的は、目指すべき人材の具体化した人物像を明確にするとともに、ディプロマ・ポリシーにおける獲得すべき資質につながることを踏まえ、学部等の教育目的については、社会の要請に応え得る個性や特色を有するように点検・改善を行い、3つのポリシーの見直しを行っている。

【基準1-2】「使命・目的および教育目的の反映」

中点検項目「使命・目的および教育目的の反映」に関する達成度分布を図1-2に示す。使命・目的等に関する教職員の理解と支持、学内外への周知、中長期計画や3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、及びアドミッション・ポリシー）への反映、教学組織構成との整合性について、S評価が37.8%、A評価が59.0%、合わせて96.8%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。各学部、学科、研究科の3つのポリシーは資料1「学生便覧2020」のそれぞれの学部等のページに記載している。

昨年度の結果と比較すると、A評価の割合が微減し、S評価の割合が微増しており、基準1-2「使命・目的等の反映」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。

学部等の教育目的を中長期的計画に反映することについては、社会が多様かつ急激に変化する情勢の中で、本学では毎年度の学部等の自己点検評価活動を通じて、中長期的計画を点検し見直すことで、柔軟に対応している。

基準1における各細点検項目（評価基準）について、達成度の平均値を表1に示す。個々の細点検項目

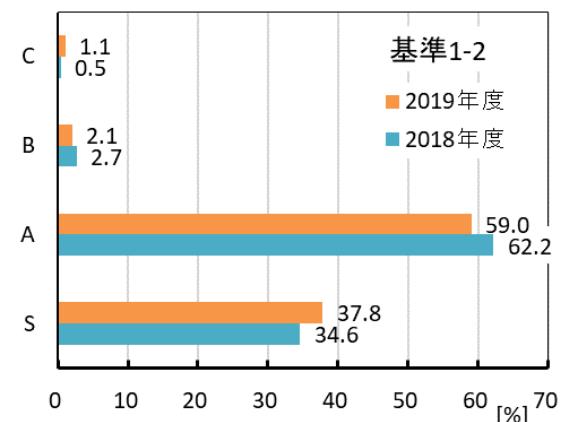


図1-2 「使命・目的等の反映」に関する達成度分布

表1 「使命・目的等」に関する
達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
1-1-①	3.4	3.5
1-1-②	3.4	3.4
1-1-③	3.3	3.3
1-2-①	3.4	3.4
1-2-②	3.3	3.3
1-2-③	3.3	3.3
1-2-④	3.4	3.3
1-2-⑤	3.2	3.3
平均	3.3	3.4

ごとに検証すると、全細点検項目で標準値の2.5を超えて3.3以上で達成度は非常に高く、昨年度と比較すると、平均値はやや高くなっている。また、基準1における細点検項目（評価基準）の達成度分布を図1-3にレーダーチ

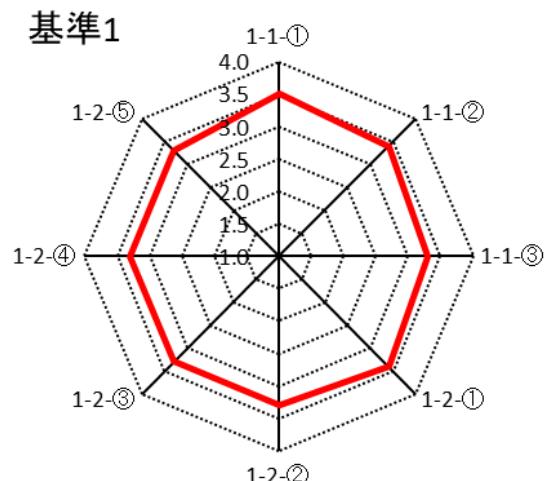


図1-3 「使命・目的等」に関する細点検項目の達成度分布

ヤートで示す。達成度はほぼ平均的な分布であることから、基準 1 の達成度では大きな偏りはなく、全体的に非常に良好であると考えられる。

(2) 学 生

大点検項目の「基準 2. 学生」として、本学における学生の受入れ、学生の支援、学修環境、キャリア支援、学生サービス、学修環境の整備、学生の意見・要望等への対応について点検した。この評価基準における 6 つの中点検項目（細点検項目は 23 項目）に関する大学全体の達成度を図 2 に示す。

大学全体の達成度は S 評価が 35.9%、A 評価が 55.0% であり、合わせて 90.9% を占め、全体の達成度は非常に高い。また、昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が微減し、S 評価の割合が微増しており、年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。以下に基準 2 の中点検項目について概説する。

【基準 2-1】「学生の受入れ」

中点検項目「学生の受入れ」に関する達成度分布を図 2-1 に示す。教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知、アドミッション・ポリシーに沿った学生受入れの実施とその検証に基づく改善、入学生受入れ状況とその分析、入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持と対策について、S 評価が 41.1%、A 評価が 48.4%、合わせて 89.5% を占め、全体の達成度は非常に高いことがわかる。

また、昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が 8.9 ポイント減少し、S 評価の割合が 7.8 ポイント増加していることから、「学生の受入れ」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善に向けた努力を払い、施策を実施したことが認められる。

本学は、平成 29（2017）年度に受審した評価機構による大学機関別認証評価において、収容定員充足率が 0.7 倍未満の学科は改善の必要ありとの指摘を受けている。現在も全学的に収容定員を満たすことは喫緊の課題であり、不断の教育改革、魅力ある教育・研究活動の展開、効果的な広報活動、学生・教職員の積極的な社会（地域）貢献活動、入試戦略の見直しと強化、入学定員の適正化、プランディング戦略の強力な展開等に取組むことで入学定員及び収容定員確保に努力している。

学生募集において効果的な広報事業の一つであるオープンキャンパスの参加状況を資料 8 「福山大学 Open Campus 参加状況（2015 年～2019 年）」に示した。オープンキャンパス参加者が本学に進学する割合は高い。大学見学会を 2 回、体験入学会を 2 回開

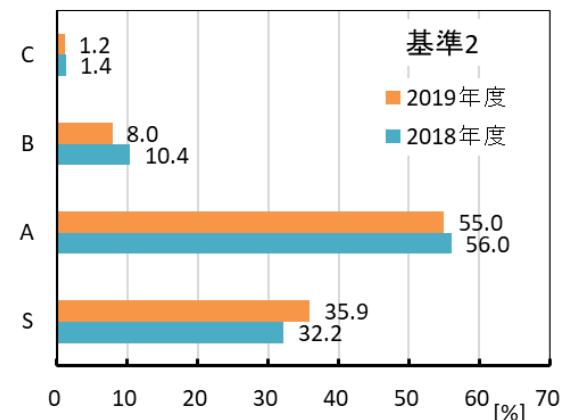


図 2 「学生」に関する全細点検項目に対する達成度分布

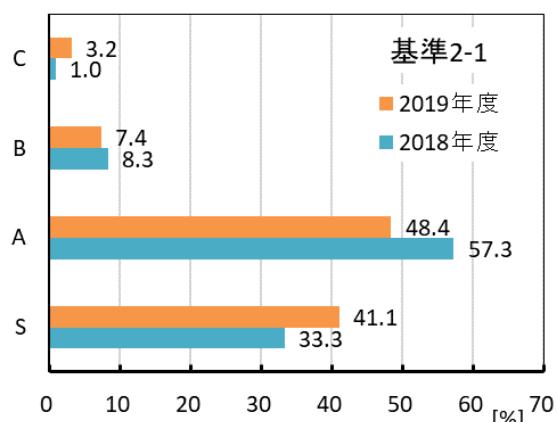


図 2-1 「学生の受入れ」に関する達成度分布

催しており、オープンキャンパスへの参加者数は平成 28(2016)年度から増加傾向にある。平成 28(2016)年度から令和 2(2020)年までの本学入学試験の志願者数、合格者数及び入学者数の推移を資料 9に示した。学部・学科により違いはあるものの、機関別認証評価で収容定員充足率の改善を求められた国際経済学科、メディア・映像学科、スマートシステム学科の回復が著しい。また、大学全体でも増加傾向にあり、令和 2(2020)年の入学定員充足率は 95.5%にまで回復している。本点検項目の達成度が高く評価されているのは、これらの成果に基づいた結果であると推定している。

なお、入学定員充足率及び収容定員充足率の改善について、令和元(2019)年 7月に改善結果報告書を日本高等教育評価機構に提出し、受理されている。

【基準 2-2】「学修支援」

中点検項目「学修支援」に関する達成度分布を図 2-2 に示す。教員と職員等の協働等による学修支援体制の整備と周知、TA 等の有効活用等による学修支援の充実について、S 評価が 36.7%、A 評価が 59.2%、合わせて 95.9%を占め、全体の達成度は極めて高い。

また、昨年度の結果と比較すると、A 評価と S 評価の割合がともに微増しており、一方 B 評価の割合が半減していることから、基準 2-2「学修支援」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が、全学的に大きく高まっており、改善の大きな努力が認められる。

これは、全学的学修体制として、教務委員会、学生委員会及び大学教育センター運営委員会など、教員及び職員で構成する教学関係の各種委員会で教職協働を行い、各学部の学修体制として、学部事務室と学部教員が連携して教職協働に努めている成果と考えられる。また、本学の学生支援ポリシー(資料 1「学生便覧 2020」210 頁参照)における学修支援内容に基づき、全学的には大学教育センターが主管する学修支援相談室の推進や e ラーニング教材の提供による学修支援体制をはじめ、学部等の授業や学生実験における TA の有効活用等のきめ細かい学修支援活動による教職協働の成果と考えられる。

【基準 2-3】「キャリア支援」

中点検項目「キャリア支援」に関する達成度分布を図 2-3 に示す。キャリア形成支援体制の整備、卒業生の進路に関する検証、資格取得やインターンシップ支援、就職指導の適切性と就職の質及び内定率の向上について、S 評価が 47.4%、A 評価が 49.5%、合わせて 96.9%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が微減し、S 評価の割合が微増しており、B 評価も半減していることから、「キャリア支援」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が、全学的に高まっており、改善の努力が認められる。

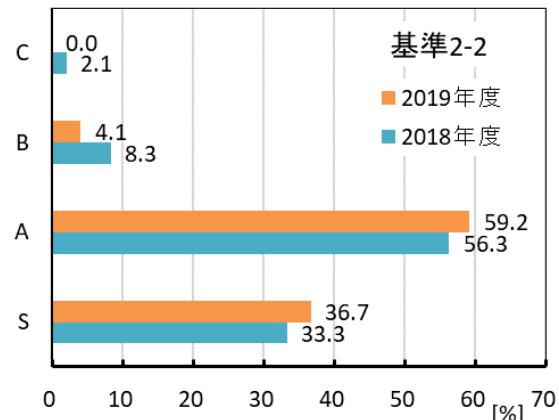


図 2-2 「学修支援」に関する達成度分布

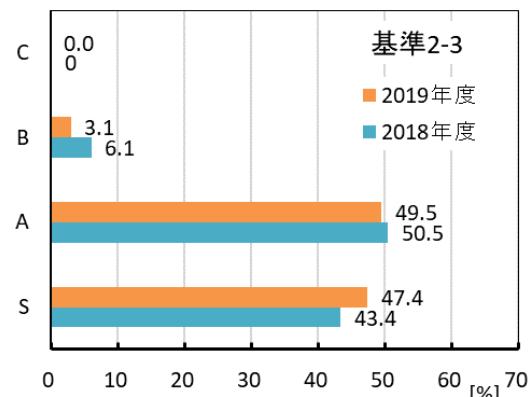


図 2-3 「キャリア支援」に関する達成度

本学の学生支援ポリシーに基づき、キャリア形成支援委員会がキャリア形成支援や自分未来創造室と協働するインターンシップ活動（Bingo Open インターンシップ）を支援している。表 2 に示すように、Bingo Open インターンシップは他大学の学生も受入れており、参加学生数及び協力いただく受入れ企業数は年々増加している。

表2 Bingo Open インターンシップ 受入企業数
及び参加学生数

年度	受入企業数	参加学生数(延べ)
2019	104 社	257 名
2018	73 社	151 名
2017	48 社	114 名

資格取得については、資料 10「資格取得支援状況とその取得状況」に示すように、種々の資格試験に對して受験料の一部を補助するなど、資格取得支援センターが全学及び学部等の資格取得活動を支援している。一方、学生の就職活動支援として就職委員会が就職ガイダンス、就職相談等を行っている。また、所属学科の就職委員会委員や卒業研究指導教員が学生一人ひとりを個別に指導して、全学的な支援体制と学部等が密接に連携して就職活動を支援している。表 3 に過去 3 年間の就職と実就職率を示した。就職を希望する卒業生の就職率は高い。しかし、就職を希望しない学生も多く、いわゆる実就職率は低くなっている。卒業後のキャリア形成を指導することが重大な課題となっている。

表3 卒業生就職状況（2017年度～2019年度）
(単位: %)

		平成29年度 (2017年度)		平成30年度 (2018年度)		令和元年度 (2019年度)		
学 部	学 科	就職率	実就職率	就職率	実就職率	就職率	実就職率	全国平均
経済	経済	100.0	93.7	100.0	93.7	100.0	92.7	89.8
	国際経済	100.0	66.7	100.0	68.4	100.0	71.9	
	税務会計	100.0	75.7	100.0	88.9	100.0	87.5	
	学部小計	100.0	87.2	100.0	89.3	100.0	89.0	
人間文化	人間文化	95.8	82.1	100.0	88.9	94.3	86.8	87.4
	心理	100.0	93.9	100.0	100.0	100.0	87.5	
	メディア・映像	100.0	57.1	100.0	92.0	100.0	91.7	
	学部小計	98.4	82.7	100.0	93.9	97.8	88.2	
工	スマートシステム	100.0	100.0	100.0	85.7	100.0	100.0	94.7
	建築	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
	情報工	97.1	97.1	100.0	100.0	100.0	100.0	
	機械システム工	100.0	96.6	100.0	96.7	100.0	97.3	
	学部小計	99.2	98.5	100.0	98.4	100.0	99.3	
生命工	生物工	100.0	97.1	97.5	92.9	100.0	93.5	94.7
	生命栄養科	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	97.6	94.3
	海洋生物科	100.0	100.0	100.0	95.7	100.0	94.8	94.7
	学部小計	100.0	99.4	99.4	96.0	100.0	95.1	—
薬	薬	100.0	70.3	100.0	77.8	100.0	87.8	91.1
全学部全学科		99.6	89.8	99.8	90.9	99.7	92.0	—

$$(就職率) = (\text{就職者数}) \div (\text{就職希望者数}) \times 100$$

$$(実就職率) = (\text{就職者数}) \div \{ (\text{卒業者数}) - (\text{大学院研究科等進学者数}) \} \times 100$$

【基準2-4】「学生サービス」

中点検項目「学生サービス」に関する達成度分布を図2-4に示す。学生生活のための経済的支援、ハラスメントの発生防止、課外活動の活性化について、S評価が37.3%、A評価が57.3%、合わせて94.6%を占め、全体の達成度は非常に高いことがわかる。

また、昨年度の結果と比較すると、A評価の割合が5.7ポイント減少し、S評価の割合が5.8ポイント増加しており、基準2-4「学生サービス」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が、全学的に大きく高まっていることから、改善の努力が認められる。

これは、本学では学生支援ポリシーにおける生活支援内容に基づき、本学奨学生（一般奨学生、特別奨学生）、授業料減免措置、授業料分納制度、他団体の各種奨学生の斡旋等の経済的支援を充実させている。本学学生の各種奨学生の受給状況を資料11「奨学生受給状況（2017年度～2019年度）」に示した。学生の課外活動では、資料12「福山大学学友会サークル及び活動実績」に示すスポーツ系31団体、文科系31団体が活動しており、活動費の助成や施設の整備等に努めている。

【基準2-5】「学修環境の整備」

中点検項目「学修環境の整備」に関する達成度分布を図2-5に示す。校舎等の学修環境の整備・管理の適切性、ICT教室、実習・実験施設、図書館等の活用、施設・設備の利便性、施設・設備上の運営における管理の適切性、施設・設備の防災・防火上の整備点検、劇物・危険物の安全管理、安全管理教育と防災・避難に関する安全管理教育訓練の実施について、S評価が29.7%、A評価が57.4%、合わせて87.1%を占め、全体の達成度は高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、B評価が5.7ポイント減少し、A評価やS評価の割合がともに微増していることから、基準2-5「学修環境の整備」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が、全学的に高まっていることから、改善の努力が認められる。一方で、達成度BまたはC評価が合わせて約13%（昨年度は19.6%）を占めており、昨年度に比べて減少しているものの、改善の余地が残されている。

特に、全学でPC等の個人必携化（BYOD：Bring Your Own Device）を推進している中で、ICTを活用した多様な授業を展開し、学生がより効果的に学修できる学修環境を早急に整えることが求められる。そのため、教室内の液晶プロジェクター、スクリーン、音響設備などの基本的な教室設備の改善と更新は欠かすことはできない。また、施設のバリアフリー化、倉庫等の収納スペースの確保、建物の老朽化によるトイレや空調等のアメニティ設備の改修など、学生の利便性を高めるための施設・設備の整備についても早急な対応が求められる。また、防災・防火上の整備点検については、学生や教職員

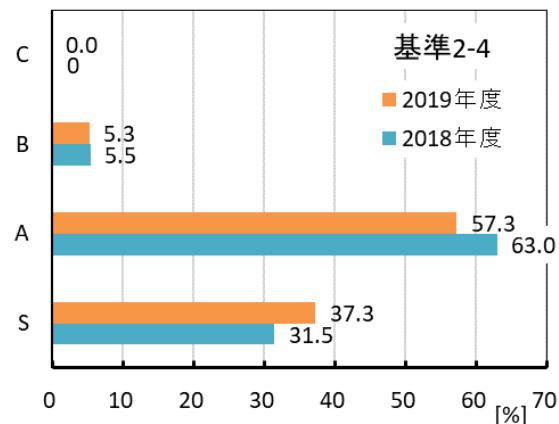


図2-4 「学生サービス」に関する達成度分布

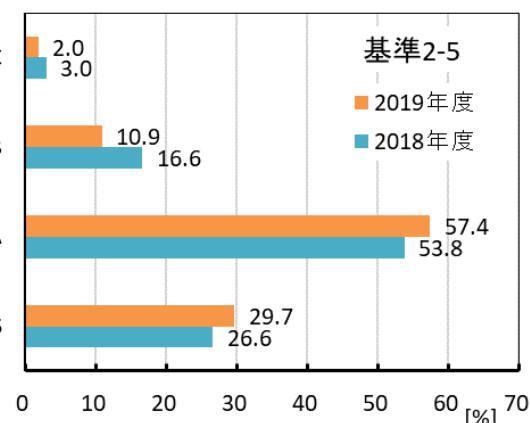


図2-5 「学修環境の整備」に関する達成度分布

の安全・安心を確保する観点から遺漏のないように全学的な対応が求められる。安全管理教育については、資料13「福山大学 安全衛生管理の手引き」、資料14「福山大学 危機管理基本マニュアル(第1版)」、資料15「福山大学 自然災害対応マニュアル」を刊行しており、全学生を対象にマニュアルの配付及び自然災害の対応について指導している。災害等の発生時には学生・教職員の安否を確認するシステムを構築しており、毎年安否確認訓練を実施している。

令和2（2020）年2月頃から、日本全国で新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、本学では、危機管理規程に基づき、令和2（2020）年3月初めに危機対策本部（本部長：学長）を設置し、対応している。具体的には、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、2019年度学位記授与式を中止するとともに、形式を変更して学位記を授与した。また、2020年4月8日～5月1日までの臨時休業措置、5月7日からの遠隔授業の実施、学生のネットワーク環境整備のために全学生に対して1人あたり5万円の支援金を支給するなど、迅速な対応を行っている。

【基準2-6】「学生の意見・要望への対応」

中点検項目「学生の意見・要望への対応」に関する達成度分布を図2-6に示す。学修支援、健康相談や経済的支援をはじめとする学生生活及び学修環境に関する学生の意見・要望に対応する体制について、S評価が28.8%、A評価が58.9%、合わせて87.7%を占め、全体の達成度は高い。また、昨年度の結果と比較すると、A評価とS評価の割合が微減し、反対にB評価の割合が4.0ポイント増加して10%を超えていることから、基準2-6「学生の意見・要望への対応」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が、全学的にやや低下しており、改善の努力が求められる。これは、学修支援に関する学生の意見・要望を把握するための調査やその分析をしていない学部等があったこと、また実施に至っても学生の意見や要望の分析結果を活用する体制については未成熟であるなど、昨年度と同様に改善の余地があると考えられる。なお、学生委員会が2018年度から学生生活アンケートを実施して学生の要望を収集しているが、このアンケート調査は2年に一度の割合で実施するため、2019年度は実施していなかったことも原因である。

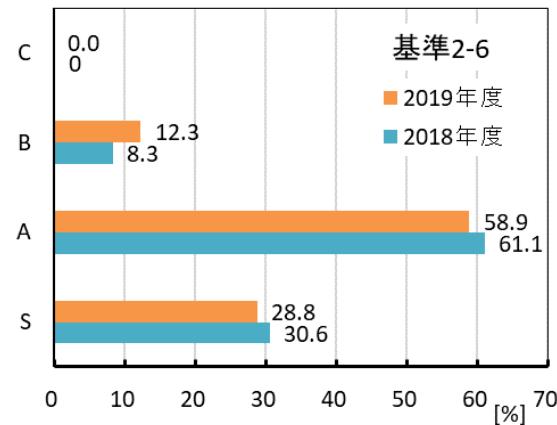


図2-6 「学生の意見・要望への対応」に関する達成度分布

基準2における各細点検項目（評価基準）について、達成度の平均値を表4に示す。

個々の細点検項目ごとに検証すると、全細点検項目で標準値の2.5を超えているものの、3.0未満の細点検項目（評価基準）2-5-③「施設・整備のバリアフリー化やアメニティースペースの確保など、学生の利便性を高めるために、どのように取組んでいますか。」については、達成度の平均値が2.8と細点検項目の中で最低値であり、改善の余地は大きいと考えられる。

昨年度の結果と比較すると、細点検項目2-5-⑤「防火・防災の観点からの整備・点検」及び2-5-⑦「安全管理教育の実施、災害時避難マニュアルの作成と防災訓練等の実施」は達成度が高くなっていることから改善が進み、基準2全体の達成度の平均値もやや高くなっている。

次に、基準2の細点検項目の達成度分布を図2-7に示す。基準2の達成度分布は平均的ではなく、中

点検項目 2-5 「学修環境の整備」では、細点検項目によって達成度の高低差が大きいことが示された。

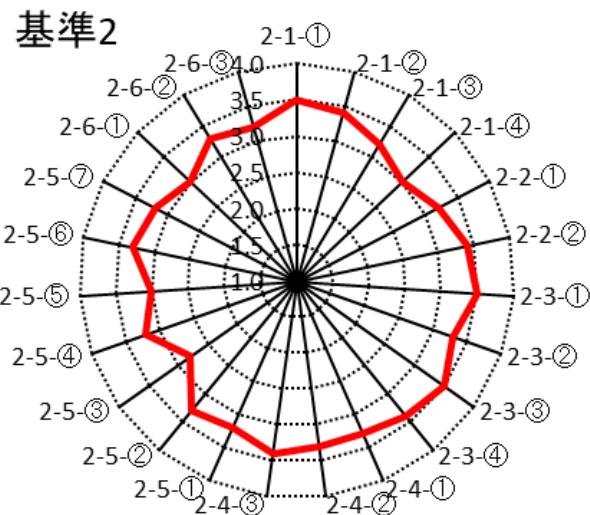


図 2-7 「学生」に関する細点検項目の達成度分布

表 4 「学生」に関する達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
2-1-①	3.4	3.5
2-1-②	3.2	3.4
2-1-③	3.3	3.2
2-1-④	3.1	3.0
2-2-①	3.1	3.2
2-2-②	3.3	3.4
2-3-①	3.4	3.5
2-3-②	3.3	3.3
2-3-③	3.3	3.5
2-3-④	3.5	3.4
2-4-①	3.2	3.3
2-4-②	3.2	3.3
2-4-③	3.4	3.4
2-5-①	3.3	3.2
2-5-②	3.1	3.3
2-5-③	2.8	2.8
2-5-④	3.0	3.2
2-5-⑤	2.8	3.0
2-5-⑥	3.3	3.3
2-5-⑦	2.9	3.2
2-6-①	3.1	3.0
2-6-②	3.3	3.3
2-6-③	3.3	3.2
平均	3.2	3.3

(3) 教育課程

大点検項目の「基準 3. 教育課程」として、本学における卒業認定、教育課程、学修成果について点検した。この評価基準における 3 つの中点検項目（細点検項目は 11 項目）に関する大学全体の達成度を図 3 に示す。

大学全体の達成度は、S 評価が 50.2%、A 評価が 45.9%、合わせて 96.1% を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

また、昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が 5.0 ポイント減少し、S 評価の割合が 6.3 ポイント増加していることから、年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。

以下に基準 3 の中点検項目について概説する。

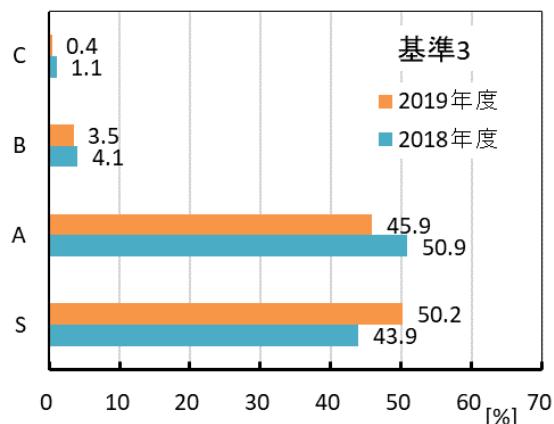


図 3 「教育課程」に関する全細点検項目に対する達成度分布

【基準3-1】「単位認定、卒業認定、修了認定」

この中点検項目に関する達成度分布を図3-1に示す。教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの周知、ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定、進級、卒業認定、修了認定に関する各基準の策定と周知、各基準の公表と厳正な適用について、S評価が58.0%、A評価が39.1%、合わせて97.1%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。昨年度の結果と比較すると、A評価の割合が10.2ポイント大幅に減少し、反対にS評価の割合が8.7ポイント増加していることから、基準3-1「単位認定、卒業認定、修了認定」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。

学部等の教育目的と3つのポリシーについては、毎年度、学部等で点検を続け、必要があれば見直している。また、単位認定、進級・卒業認定及び修了認定の基準は、各学科、各学部教授会及び各研究科委員会で策定し、これらの基準の公表については、学内では学生ポータルシステム「Zelkova」によるシラバス、学生便覧によって学生に周知している。

【基準3-2】「教育課程及び教授方法」

中点検項目「教育課程及び教授方法」に関する達成度分布を図3-2に示す。カリキュラム・ポリシーの策定と周知、ディプロマ・ポリシーとの一貫性、カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系性、教授方法の工夫・開発と有効性、ディプロマ・ポリシーと卒業判定の整合性について、S評価が50.0%、A評価が47.9%、合わせて97.9%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、B評価の割合が半減するとともにA評価の割合が5.5ポイント減少し、S評価の割合が8.9ポイント大きく増加していることから、「教育課程及び教授方法」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の大きな努力が認められる。

これは、前述のように、学部等の教育目的と3つのポリシーを毎年度、学部等で点検を続け、必要があれば見直していること、併行してカリキュラム・マップの見直しとカリキュラムの体系性も検討を重ねていること、また、平成30（2018）年度に導入した科目ナンバーリング制度によるカリキュラムの体系性を明確化したことが考えられる。また、BYODの推進とともに、ICTを活用した教授の工夫・開発、学修環境整備の必要性が高まっている。これについては、令和2（2020）年度前期に新型コロナウイルス感染拡大防止のために、実験・実習等を除くほぼすべての授業を遠隔授業で行ったことから、すべての教員のICT活用技術が飛躍的に高まったことは間違いない。

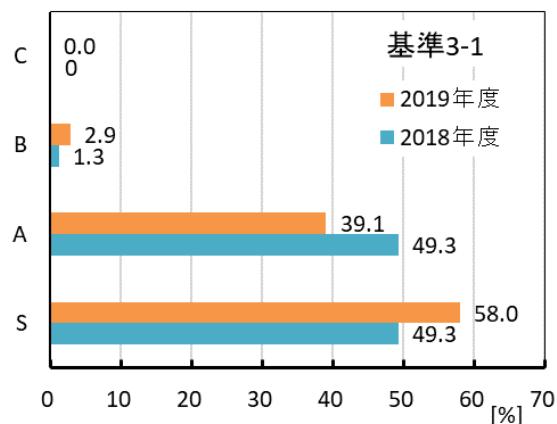


図3-1 「単位認定、卒業認定、修了認定」に関する達成度分布

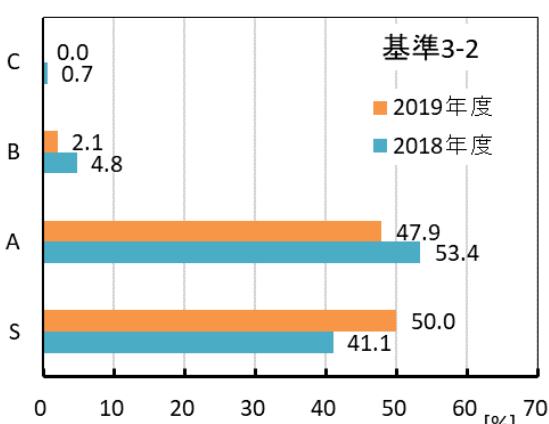


図3-2 「教育課程及び教授方法」に関する達成度分布

【基準3-3】「学修成果の点検・評価」

中点検項目「学修成果の点検・評価」に関する達成度分布を図3-3に示す。3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用の検証、その結果を教育内容・方法及び学修指導等の改善につなげることについて、S評価が39.1%、A評価が50.0%、合わせて89.1%を占め、全体の達成度は高い。

昨年度の結果と比較すると、S評価の割合が4.7ポイント減少する一方、A評価の割合が4.2ポイント増加するとともにB評価の割合も微増しており、基準3-3「学修成果の点検・評価」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的にやや低下しており、改善の余地が残されている。

学修成果の点検・評価については、各学科の卒業論文・卒業研究・課題研究の評価ループリックや大学及び全学科がアセスメント・ポリシー(学修成果の評価の方針)を策定している(資料1「学生便覧2020」6頁を参照)。本学のアセスメント・ポリシーは各学科が掲げるディプロマ・ポリシーに示す資質について学生個人の修得度を評価し、学修指導に活用する。そして、学科の学生全体の資質修得度評価を基に学科の教育プログラムの検証と改善に活用する。さらに、全学学生の卒業時における大学のディプロマ・ポリシーに掲げる資質修得度の評価を基に福山大学教育プログラムの検証と改善に取組むシステムを構築している。資料16「2019年度アセスメント集計結果」に令和元(2019)年度の集計結果を示す。

しかし、アセスメント・ポリシーの活用と学修成果の点検・評価の検証など、運用面において十分に機能するまでには至っていない学部・学科もあり、アセスメント・ポリシーを検討中で策定に至っていない大学院研究科もあり、達成度評価の低下につながったものと考えられる。今後、アセスメント・ポリシーを活用した学修成果の点検・評価、学科カリキュラム及び本学の教育プログラムの検証と改善が進展することを期待したい。

基準3における各細点検項目(評価基準)について、達成度の平均値を表5に示す。

個々の細点検項目ごとに検証すると、全細点検項目で達成度は標準値の2.5を超えて3.2以上であることがわかる。昨年度の結果と比較すると、細点検項目3-2-④(教養教育の十分な実施)について達成度が特に高くなっていることから、教養教育の改善が認められ、基準3全体の達成度の平均値もやや高くなっている。

次に、基準3における細点検項目(評価基準)の達成度分布を図3-4に示す。

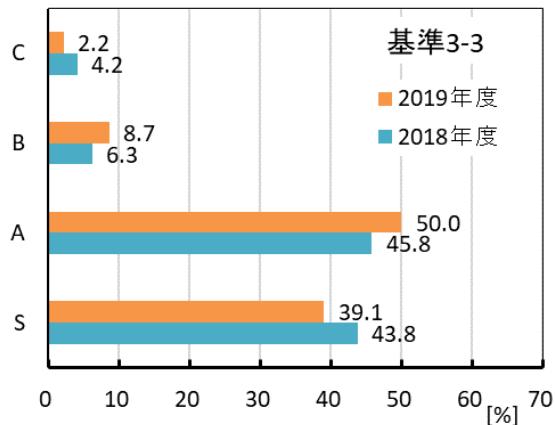


図3-3 「学修成果の点検・評価」に関する達成度分布

表5 「教育課程」に関する達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
3-1-①	3.5	3.6
3-1-②	3.4	3.6
3-1-③	3.5	3.5
3-2-①	3.5	3.5
3-2-②	3.5	3.6
3-2-③	3.4	3.5
3-2-④	3.2	3.5
3-2-⑤	3.1	3.2
3-2-⑥	3.5	3.5
3-3-①	3.3	3.2
3-3-②	3.3	3.3
平均	3.4	3.5

基準3の達成度分布は、一部の低い達成度が目立ち、ほぼ平均的とは認めにくい。達成度3.2である2つの細点検項目3-2-⑤「教授方法を工夫・開発（ICTの活用を含む）し、効果的に実施していますか。」及び、3-3-①「全学及び各学科等のアセスメント・ポリシーの活用も含め、3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用をどのように検証していますか。」については、特に改善を期待したい。

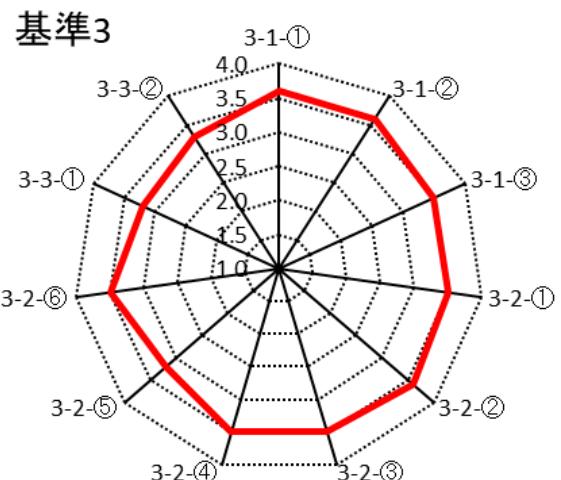


図3-4 「教育課程」に関する細点検項目の達成度分布

(4) 教員・職員

大点検項目の「基準4. 教員・職員」として、本学における教学マネジメントの機能性、教員の配置・職能開発、職員の研修、研究支援について点検している。ここで、職員とは、事務職員だけでなく、学部等における助手や技術職員等も含まれる。この評価基準における4つの中点検項目（細点検項目は12項目）に関する大学全体の達成度を図4に示す。

大学全体の達成度は、S評価が33.3%、A評価が58.7%、合わせて92.0%を占め、全体の達成度は非常に高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、B評価の割合が微減し、一方で、A評価とS評価の割合が微増しており、年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的にはやや高まっていることが認められる。以下に基準4の中点検項目について概説する。

【基準4-1】「教学マネジメントの機能性」

中点検項目「教学マネジメントの機能性」に関する達成度分布を図4-1に示す。学長の適切なリーダーシップの確立、学部等の長によるリーダーシップの適切性、教職員間における権限・役割の分散化と責任の明確化、職員の配置と役割の明確化について、S評価が34.2%、A評価が63.2%、合わせて97.4%を占め、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

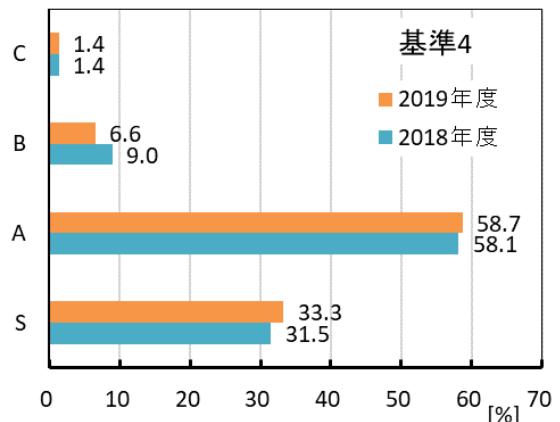


図4 「教員・職員」に関する全細点検項目に対する達成度の評価分布

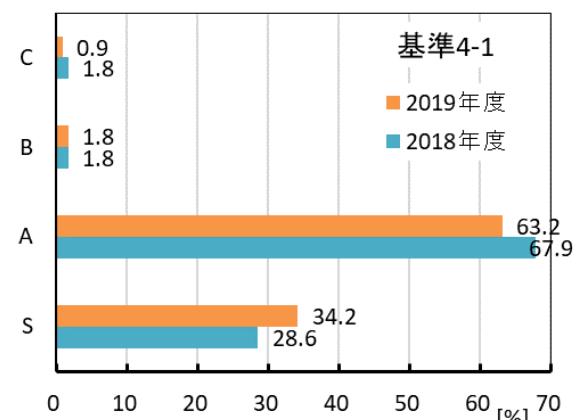


図4-1 「教学マネジメントの機能性」に関する達成度分布

また、昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が 4.7 ポイント減少し、S 評価の割合が 5.6 ポイント増加していることから、基準 4-1 「教学マネジメントの機能性」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に一層高まっており、改善の努力が認められる。

学長や学部等における当該組織の長のリーダーシップは十分に確立しており、本学の教学マネジメントの機能性は高いと考えられる。

【基準 4-2】「教員の配置・職能開発等」

中点検項目「教員の配置・職能開発等」に関する達成度分布を図 4-2 に示す。学部等における適切な資質を有する教員の配置及び学部等の運営の適切性や持続可能な構成、大学設置基準や資格養成機関に必要な教員数の確保、教員の資質向上に向けた取組について、S 評価が 44.9%、A 評価が 42.0%、合わせて 86.9%を占め、全体の達成度は高いことがわかる。昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が 5.9 ポイント減少し、S 評価の割合が 9.7 ポイント大きく増加していることから、教員の配置・職能開発等に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に高まっており、改善の努力が認められる。しかし、B 評価の割合が昨年度と同様に 10%を超えている点については、主に教員の年齢構成や男女比率の偏りの是正、資格関係をはじめとする教員の適切な配置を要望する学部等の当該組織が採用人事計画を立案したが、改善に結びつけることが出来なかつた結果であると考えられる。

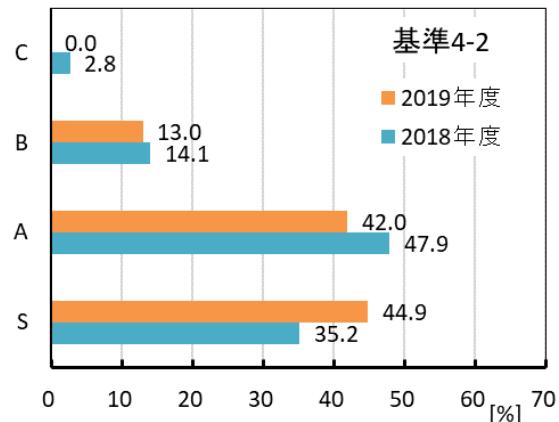


図 4-2 教員の配置・職能開発等に関する達成度分布

【基準 4-3】「職員の研修」

中点検項目「職員の研修」に関する達成度分布を図 4-3 に示す。教職員の資質・能力向上と教職協働への取組、大学運営の効率化のための ICT の活用推進について、S 評価が 20.0%、A 評価が 72.0%、合わせて 92.0%を占め、全体の達成度は非常に高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、B 評価の割合が 9.2 ポイントの大幅な減少とともに、A 評価の割合が 12.8 ポイントの突出した大幅な増加と、S 評価の割合が 7.6 ポイントの大きく減少を示していることから、基準 4-3 「職員の研修」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に A 評価に集中する傾向にあり、S 評価が少ないことは気がかりである。

全学的な SD 活動は大学教育センターが主導しているが、学部等でも独自の SD 活動に取組み始めている。また、次年度予算要求では各学部、学科、事務局とともに学外で開催される種々の研修会への職員の派遣を計画しており、さらなる改善を期待したい。

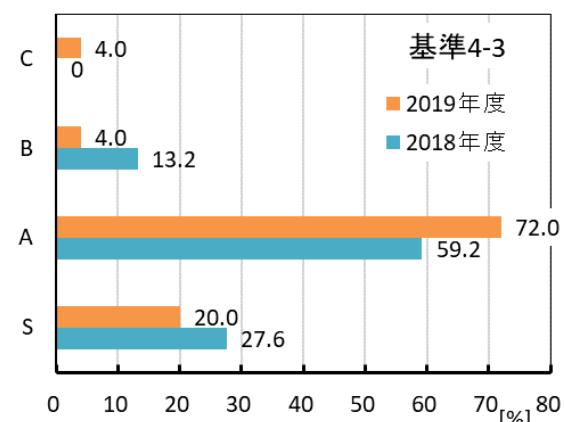


図 4-3 「職員の研修」に関する達成度分布

【基準4-4】「研究支援」

中点検項目「研究支援」に関する達成度分布を図4-4に示す。研究時間の確保や研究環境の管理の適切性、研究倫理の確立と厳正な運用、研究活動への資源の配分や運用の適切性、公的研究費の運営・管理の整備と周知について、S評価が34.3%、A評価が55.6%、合わせて89.9%を占め、全体の達成度は非常に高いことがわかる。一方で、B評価の割合が10%前後であることに注意を要する。昨年度の結果と比較すると、どの評価においてもほぼ同じ割合であることから、基準4-4「研究支援」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度の改善は進んでいない。

本学では、安全安心防災教育研究センター、内海生物資源研究所、グリーンサイエンス研究センター、備後圏域経済・文化研究センターを設置して教員の研究環境を整備し、これらのセンター等を拠点として行う全学研究プロジェクト「瀬戸内の里山・里海学」を支援している。

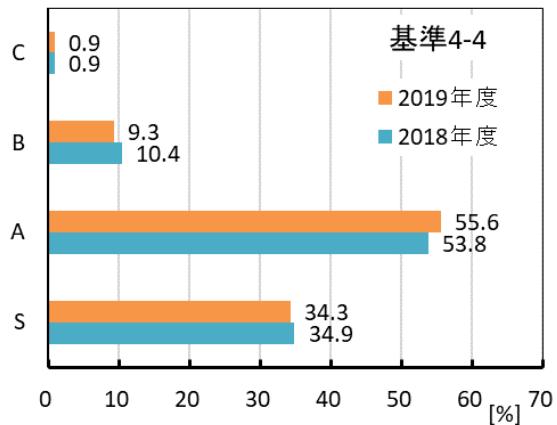


図4-4 「研究支援」に関する達成度分布

基準4における各細点検項目（評価基準）について、達成度の平均値を表6に示す。個々の細点検項目ごとに検証すると、全細点検項目で標準値2.5を超えてるもの、細点検項目4-4-①「研究に専念する時間の確保、研究室の施設設備の整備等の研究環境を適切に管理していますか。」についての達成度の平均値は2.7である。

昨年度の結果と比較すると、細点検項目（評価基準）4-2-①「当該部署の教育目的及び教育課程に即した資質を有する教員を配置していますか。また、当該部署の適切な運営及び継続性を担保する構成（性別、年齢、職階等）となっていますか。」についての達成度の平均値は、昨年度2.8から今年度3.2に大

表6 「教員・職員」に関する達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
4-1-①	3.3	3.4
4-1-②	3.4	3.4
4-1-③	3.0	3.1
4-2-①	2.8	3.2
4-2-②	3.3	3.4
4-2-③	3.3	3.4
4-3-①	3.2	3.2
4-3-②	3.1	3.0
4-4-①	2.7	2.7
4-4-②	3.4	3.4
4-4-③	3.3	3.2
4-4-④	3.5	3.6
平均	3.2	3.3

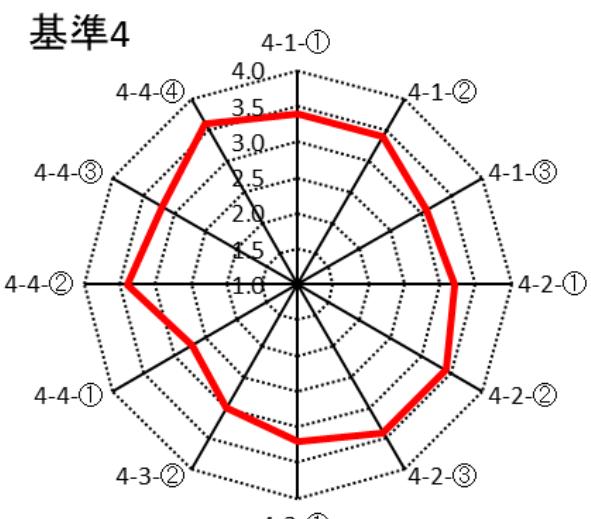


図4-5 「教員・職員」に関する細点検項目の達成度分布

きく改善している。一方、細点検項目 4-4-①については昨年度と同じ最低値を示しており、改善が進んでいるとは考えにくい。

次に、基準 4 における細点検項目の達成度分布を図 4-5 に示す。基準 4 の達成度分布は、平均的でなく、特に中点検項目 4-4 「研究支援」の高低差は大きい。このように、毎年度の達成度が相対的に突出して低い状態にあって改善が進んでいない細点検項目 4-4-①については、改善の困難さを浮き彫りにしている。この項目で、多くの学部・学科が抱えている問題は、研究に専念する時間の確保である。特に、大学設置基準と同じかそれに近い専任教員数の学科では、教員一人当たりの校務負担が大きくなることは自明の理である。したがって、ICT の活用を進めて業務の効率化を図るもの、研究に専念する時間の確保が難しい状況は改善されていない。

一方、研究室の施設設備の整備などの研究環境の管理については、特定の研究機器・設備の共有化と外部資金の獲得を推進して対応している。また、高度な研究機器を一元的に管理して全学で共同利用する共同利用センターを設置して、高額研究機器の効率的活用を推進している。資料 17 「共同利用センター管理機器一覧」に現有の研究機器及び今後の導入計画等を示している。本学における外部研究資金の獲得状況を資料 18 「外部研究資金獲得状況」に示す。研究時間の確保が難しい状況での研究の遂行は厳しさを増している。このような状況を抜本的に改善する必要があり、適切な対策が求められている。

(5) 経営・管理および財務

日本高等教育評価機構の大学基準では、基準 5 として、経営・管理及び財務に関する次の 5 つの中点検項目（10 細点検項目）を点検することが求められている。「5-1 経営の規律と誠実性」、「5-2 理事会の機能」、「5-3 管理運営の円滑化と相互チェック」、「5-4 財務基盤と収支」、「5-5 会計」。

これらの項目は本学を経営する学校法人福山大学（以下、法人）において点検・評価するものである。法人は法令順守を基本とし、平成 27～令和 6 年度 中・長期財政計画に基づいて本学及び福山平成大学を運営している。また、データに基づいて大学の将来展望を法人理事会等で説明している。また、資料 19 「令和元年度 学校法人福山大学 財務状況」に示すように財務の状況は健全であり、大学ホームページ及び学報で公表している。よって、基準 5 に関する記載を省略する。

(6) 内部質保証

大点検項目の「基準 6. 内部質保証」として、本学における内部質保証の組織、内部質保証のための自己点検・評価、内部質保証の機能性について点検した。この基準における 3 つの中点検項目（5 つの細点検項目）に関する大学全体の達成度を図 5 に示す。

大学全体の達成度は、S 評価が 32.2%、A 評価が 57.5%、合わせて 89.7% を占め、全体の達成度は高いことがわかる。

また、昨年度の結果と比較すると、どの評価においてもほぼ同じ割合であることから、年度目標や方針に基づいた活動の達成度は全学的には一定の水準を維持し

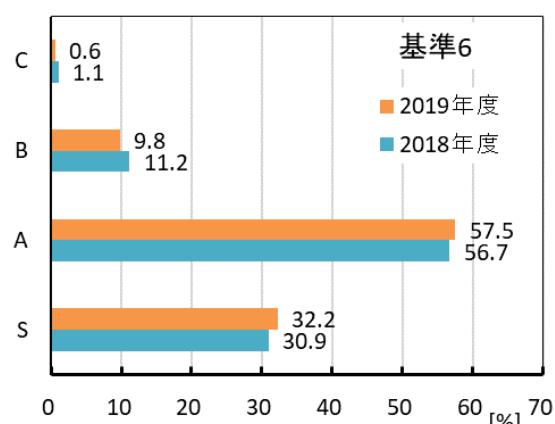


図 5 「内部質保証」に関する全細点検項目に対する達成度分布

ている。以下に基準 6 の中点検項目について概説する。

【基準 6-1】「内部質保証の組織体制」

この中点検項目に関する達成度分布を図 5-1 に示す。内部質保証の組織と責任体制の確立について、S 評価が 34.2%、A 評価が 65.8%、合わせて 100%であり、全体の達成度は極めて高いことがわかる。

また、昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が微増し、S 評価の割合が微減しているものの、B 評価及び C 評価の割合はゼロであり、基準 6-1 「内部質保証の組織体制」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度は全学的に一定以上の水準を維持しており、本学の内部質保証の組織体制は確立していると判断される。

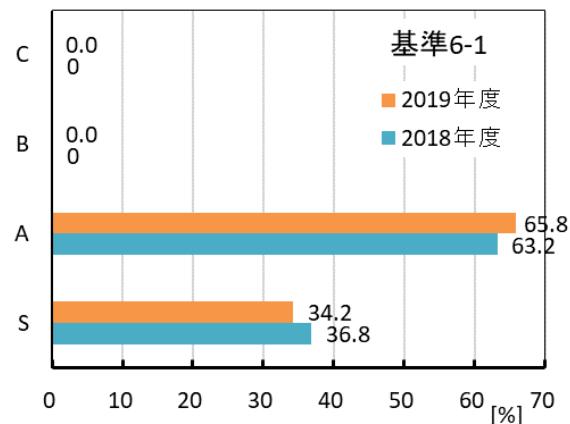


図 5-1 「内部質保証の組織体制」に関する達成度分布

【基準 6-2】「内部質保証のための自己点検・評価」

中点検項目「内部質保証のための自己点検・評価」に関する達成度分布を図 5-2 に示す。内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価、IR 等を活用した調査・データの収集と分析及び改善への活用について、S 評価が 25.0%、A 評価が 60.5%、合わせて 85.5%であり、全体の達成度は比較的高い。一方で、B 評価が 10%を超えており、昨年度の結果と比較すると、S 評価の割合は微減しているものの、A 評価の割合が 12.5 ポイント大幅に増加し、B 評価の割合が 9.5 ポイント大幅に減少していることから、「内部質保証のための自己点検・評価」に関する活動の達成度が全学的に A 評価に偏る傾向にあることがわかる。

十分な調査とデータを収集し、IR による分析と改善への活用については、IR 室主導の下、教職員間の情報共有機能を持つ専用のデジタルデータキャビネット「Karin」を運用している。IR 室をはじめ学部等による Karin の利用を推進し、調査・データの収集・蓄積を全学的に順次進めている段階である。IR を活用して学部等の抱える課題を解決するシステムや人材育成が今後の課題である。

IR 室では、教学、研究、財務・経営の 3 分野の IR 指標で構成する「福山大学 IR 指標」を策定し、学部等からのデータ集積を進めている。また、「IRer 養成学内セミナー」を開催して、教職協働と部局間の連携による IR 業務の進展に注力している。IR の本格的運用に向けた取組によって、学部等で IR の活用が前進することを期待したい。

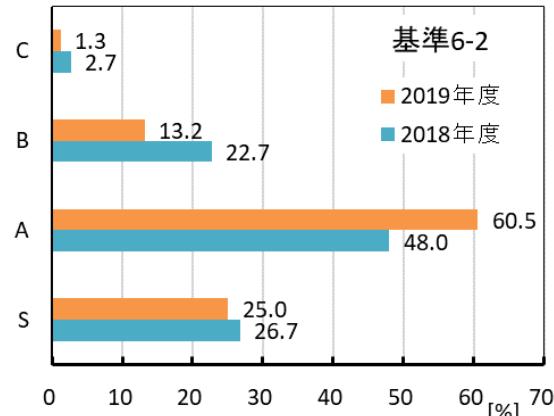


図 5-2 「内部質保証のための自己点検・評価」に関する達成度分布

【基準 6-3】「内部質保証の機能性」

中点検項目「内部質保証の機能性」に関する達成度分布を図 5-3 に示す。学部等及び大学全体の PDCA

サイクルの確立と機能性の検証、教職員のコンプライアンス体制確立について、S 評価が 40.0%、A 評価が 48.3%、合わせて 88.3%であり、全体の達成度は高いことがわかる。一方、B 評価が 10%を超えてることには注意を要する。昨年度の結果と比較すると、S 評価の割合は 7.7 ポイント増加しているものの、A 評価の割合が 14.8 ポイント大幅に減少し、B 評価の割合が 7.1 ポイント増加していることから、基準 6-3「内部質保証の機能性」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度の評価は、分散する傾向にあることがわかる。これは、PDCA サイクルは確立されているが、その機能性の検証について各学科の評価が分かれたためと考えられる。

基準 6 における各細点検項目について、達成度の平均値を表 7 に示す。個々の細点検項目ごとに検証すると、全細点検項目で標準値 2.5 を超えているが、細点検項目（評価基準）6-2-②「IR (Institutional Research) 等を活用した十分な調査・データの収集と分析を行っているか。また、その結果を改善に活かしているか。」の達成度平均値が最低値の 2.9 であり、改善の余地が残されている。しかし、昨年度の結果と比較すると、細点検項目（評価基準）6-2-②についての達成度の平均値は、昨年度 2.6 から今年度 2.9 に改善されている。

次に、基準 6 における細点検項目の達成度分布を図 5-4 に示す。細点検項目 6-2-②の改善は、前述したように、IR 室の主導の下、全学的にさまざまな取組を展開しているところであり、今後、学部等において IR の活用による改善が進展することを期待したい。

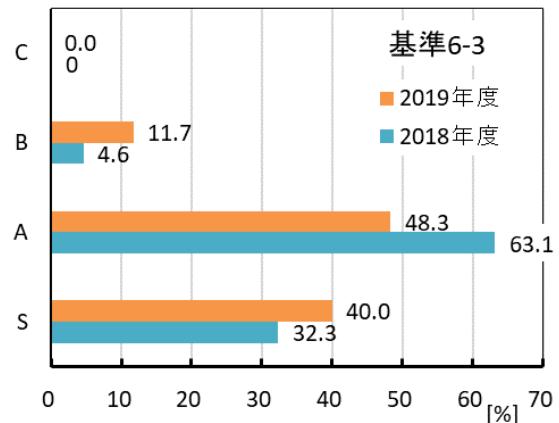


図 5-3 「内部質保証の機能性」に関する達成度分布

表 7 「内部質保証」に関する達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
6-1-①	3.4	3.3
6-2-①	3.3	3.3
6-2-②	2.6	2.9
6-3-①	3.2	3.2
6-3-②	3.4	3.4
平均	3.2	3.2

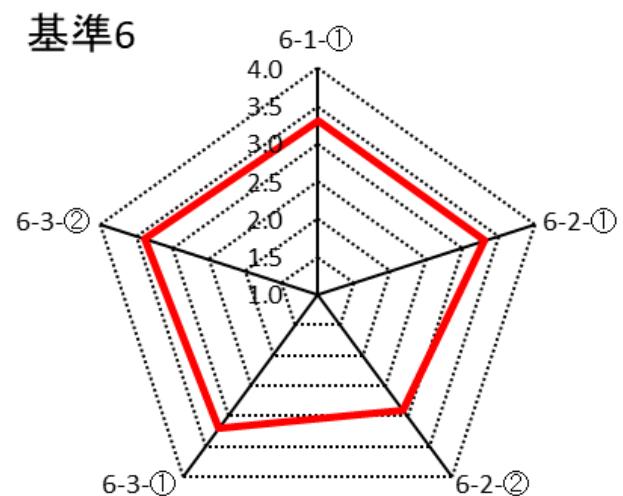


図 5-4 「内部質保証」に関する細点検項目の達成度分布

(7) 福山大学プランディング戦略

本学独自の重要戦略である福山大学プランディング戦略は、「備後地域の産学官民連携を推進し、地域の教育資源を最大限に活用して人間性を高め、地域を愛し、地域で活躍し、地域から国際社会につながる『未来創造人』を育成すること。」の方針に基づいて、本学が強力に推進しているプロジェクトである。

この福山大学プランディング戦略について自己点検・評価を行うため、大点検項目の「基準 7. 福山大学プランディング戦略」として、プランディング戦略を推進するための諸活動、プランディング推進のための研究プロジェクトについて点検した。この基準における 2 つの中点検項目（細点検項目は 10 項目）に関する大学全体の達成度を図 6 に示す。大学全体の達成度は、S 評価が 36.9%、A 評価が 50.8%、合わせて 87.7% を占め、全体の達成度は高いことがわかる。昨年度の結果と比較すると、S 評価の割合は変わらないものの、A 評価の割合は微増し、B 評価の割合が微減しており、年度目標や方針に基づいた活動の達成度は全学的にはやや改善の兆しが認められる。ただし、B 評価の割合が昨年度と変わらず 10% を超えている点については、プランディング戦略の改善課題を残している。以下に基準 7 の中点検項目について概説する。

【基準 7-1】「福山大学プランディング戦略の推進」

中点検項目「福山大学プランディング戦略」に関する達成度分布を図 6-1 に示す。

プランディング戦略に関する学部等の教職員・学生への周知、プランディングの考え方に基づく取組、プランディング方針の実現への取組、プランディング戦略の目標の実現をはじめとする人材育成、地域連携による教育研究、全人教育へのそれぞれの取組とその成果の検証、プランディング戦略のプラッシュアップについて、S 評価が 40.0%、A 評価が 50.9%、合わせて 90.9% であり、全体の達成度は非常に高いことがわかる。

昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が微減し、S 評価の割合が微増していることから、基準 7-1 「福山大学プランディング戦略の推進」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的にやや高まっていることが認められる。

【基準 7-2】「福山大学プランディング推進のための研究プロジェクト」

この中点検項目に関する達成度分布を図 6-2 に示す。学部等における全学的なプロジェクト研究の取組、研究資金の獲得、研究成果の社会への発表・還元について、S 評価が 28.7%、A 評価が 50.6%、合わせて 79.6% であり、全体の達成度は概ね高いことがわかる。昨年度の結果と比較すると、A 評価の割合が

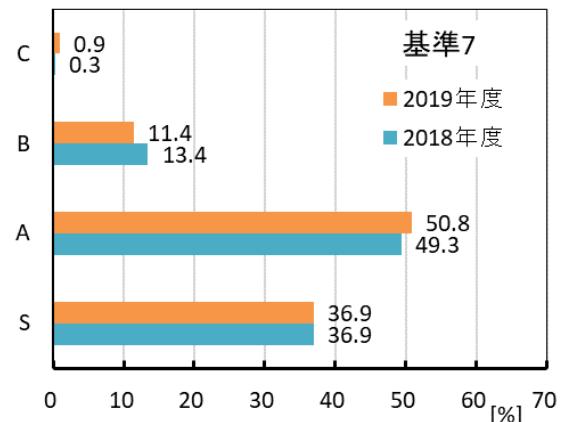


図 6 「福山大学プランディング戦略」に関する全細点検細項目に対する達成度分布

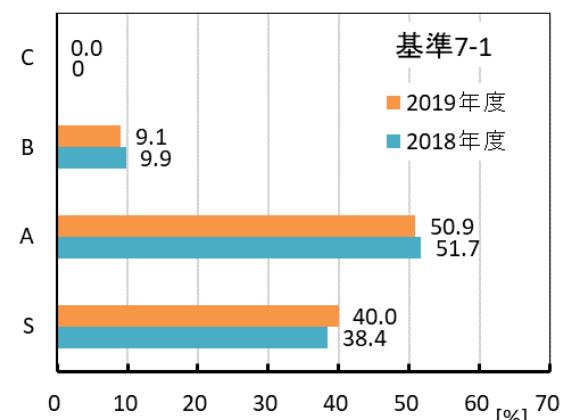


図 6-1 「福山大学プランディング戦略の推進」に関する達成度分布

6.9 ポイント増加し、S 評価の割合が 4.6 ポイント減少しているものの、B 評価の割合が 4.6 ポイント減少していることから、基準 7-2 「福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト」に関する年度目標や方針に基づいた活動の達成度が全学的に A 評価に偏る傾向にあることが認められる。また、B 評価の割合が昨年度よりも減少しているものの 15%を超えており、C 評価の割合も微増していることから、改善の困難さがうかがえる。

令和 2 (2020) 年度から設立される備後圏域経済・文化研究センターを中心に、経済学部、人間文化学部及び関係する大学院研究科における全学研究プロジェクト「瀬戸内の里山・里海学」への取組の強化を期待したい。

基準 7 における各細点検項目（評価基準）について、達成度の平均値を表 8 に示す。細点検項目毎に検証すると、全細点検項目で標準値 2.5 を超えているものの、3.0 未満の細点検項目（評価基準）7-2-②「福山大学ブランディング研究に必要な内部資金及び外部資金をどのように獲得していますか。」については、達成度の平均値が最低値の 2.9 であり、改善の余地が大きい。昨年度の結果と比較すると、7-2-②についての達成度の平均値は、昨年度 3.0 から今年度 2.9 にやや低下し、改善に向けて努力する必要があると考えられる。

本学ブランディング研究の柱となる「瀬戸内海しまなみ沿岸生態系に眠る多面的機能の解明と産業支援・教育」は、文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択されていたが、同省の不祥事により令和 2 (2019) 年度より突然の打ち切りとなった。当面の研究費は法人が負担して同研究を継続させることになっているが、今後は積極的な研究資金の獲得を期待したい。基準 7 における細点検項目（評価基準）の達成度分布を図 6-3 に示す。基準 7 の達成度分布は、平均的ではなく、中点検項目 7-2 「福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト」において達成度が低い傾向にある。福山大学ブランディング戦略を推進していくプロジェクト研究「瀬戸内の里山・里海学」をはじめ、さまざまなブランディング研究に対する支援を強化し、今後改善を重ねて学内外とともに有益な成果が得ることを期待したい。

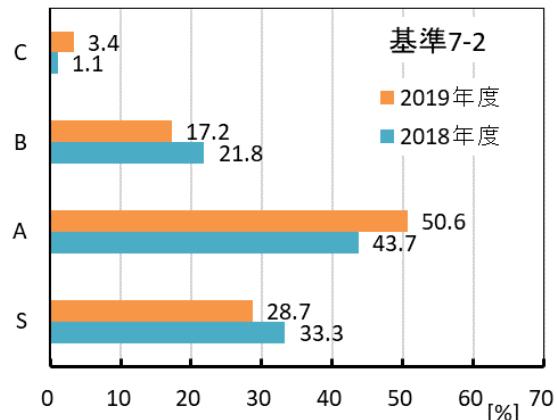


図 6-2 「福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト」に関する達成度分布

表 8 「福山大学ブランディング戦略」に関する達成度の平均値

評価基準	2018年度	2019年度
7-1-①	3.1	3.2
7-1-②	3.2	3.5
7-1-③	3.3	3.4
7-1-④	3.3	3.2
7-1-⑤	3.2	3.4
7-1-⑥	3.4	3.4
7-1-⑦	3.4	3.3
7-1-⑧	—	3.0
7-2-①	3.1	3.0
7-2-②	3.0	2.9
7-2-③	3.2	3.2
平均	3.2	3.2

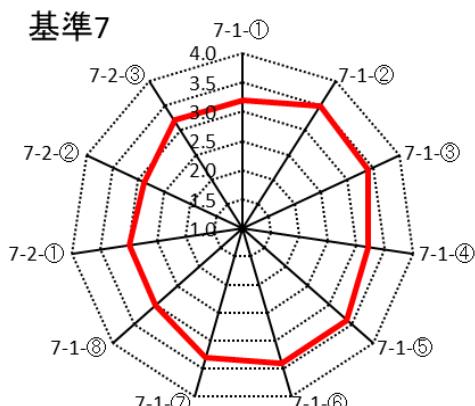


図 6-3 「福山大学ブランディング戦略」に関する細点検項目の達

(8) 理事長、学長への提言

本学の自己点検・評価では、評価の低い点検項目を抽出し、改革推進委員会においてその改善を理事長、学長に提言している。令和元（2019）年度 自己点検・評価では次の4つの課題が抽出されたので提言する。

令和元（2019）年度 「理事長、学長への提言」

令和元（2019）年度において学部等が実施した自己点検・評価の結果、すべての細点検項目（70項目）の達成度は標準値2.5を上回っていた。これは、これまでの自主的・自律的な自己点検・評価活動の推進とその実績、平成29（2017）年度に評価機構による大学機関別認証評価における大学評価基準の適合認定を経て培ってきた結果であると考えられる。これに甘んじることなく、各基準の点検項目に関する年度目標を高め、着実な実行による実績を積み、内部質保証の深化を目指すことが肝要と考える。この観点から、達成度評価が3.0未満であった次の4つの細点検項目について取上げ、改善方策の実施を提言する。

提言(1) 細点検項目2-5-③「施設・整備のバリアフリー化やアメニティースペースの確保など、学生の利便性を高めるために、どのように取組んでいますか。」に対する達成度評価は2.8であり、昨年度の評価と変わらず、改善が進んでいるとは考えにくい。30号館をはじめとする建物のバリアフリー化、図書館ラーニングコモンズの拡張、建物の老朽化によるトイレや空調などのアメニティ設備の改修なども求められている。また、BYODの推進を含め、ICTを活用する授業が急増する中で教室での利便性を高めるための必須設備である天井固定型プロジェクター、スクリーン、及び音響設備等の更新と普及について、継続的な対応が求められる。

提言(2) 細点検項目4-4-①「研究に専念する時間の確保、研究室の施設設備の整備等の研究環境を適切に管理していますか。」に対する達成度評価は2.7で全細点検項目の中でワースト1位であり、昨年度と同じ評価が続いていることから、改善が進んでいるとは考えにくい。多くの学部・学科では、ICTの活用を進めて業務の効率化を図っているが、令和元（2019）年度から推進されている働き方改革により働く時間が制限される中で、校務の負担は増加傾向にあり、研究に専念する時間の確保はますます難しくなっている。また、研究室の施設設備の整備などの研究環境の管理については、特定の研究機器・設備の共同利用化を全学的に進め、また外部資金の獲得による自助努力を基本とするものの、研究環境の自主改善は厳しさを増しており、特に理系研究室の施設設備の老朽化が進んでいる。したがって、教員の研究時間の確保と研究室の施設設備について絶えず改善に向けて工夫する必要がある。

提言(3) 細点検項目6-2-②「IR（Institutional Research）等を活用した十分な調査・データの収集と分析を行っていますか。また、その結果を改善に活かしていますか。」に対する達成度評価は2.9であった。本格的なIR活動は始まったばかりであるが、IR室では全学的な計画を着実に実行して成果が出てきている。学部等においても、IR室の主導の下、独自にIRを活用して改善につなげていくことが期待される。IRの進展には、全学的な理解と協力、情報共有、そして教職協働が必要であると考えられる。

提言(4) 細点検項目 7-2-②「福山大学プランディング研究に必要な内部資金及び外部資金をどのように獲得していますか。」に対する達成度評価は 2.9 であった。特に、経済学部・学科、大学院経済学研究科の達成度評価が全体的に低い。新しい着想によるプランディング研究プロジェクトを提案する気運を高め、内部資金及び外部資金の両面での獲得に注力する取組を期待したい。

(9) 平成 30 (2018) 年度「理事長・学長への提言」に対する改善報告

本学の自己点検・評価では、評価の低い点検項目を抽出し、改革推進委員会においてその改善を理事長、学長に提言している。平成 30 (2018) 年度 自己点検・評価書で抽出された改善課題について、以下のように改善に努めたことが報告された。

<理事長、学長の改善報告>

平成 30 (2018) 年度自己点検評価活動において、全学自己点検評価委員会が目標達成度の標準値とする 2.5 を下回る点検項目は無く、ほとんどの細点検項目が 3.0 以上であった。その中で、達成度が 3.0 未満であった以下の 6 つの細点検項目について改善の余地があると判断し、理事長・学長に提言した。そして、平成 31 (2019) 年度に実施した改善措置について改革推進員会において以下のように報告された。

提言(1)：細点検項目 2-5-③「施設・設備のバリアフリー化やアメニティースペースの確保など、学生の利便性を高めるために、どのように取組んでいますか。」に対する達成度評価は 2.8 である。施設・設備について学生の利便性が損なわれている事案を抽出し、大学全体で改善に取組むことが必要であると考えられる。

改善方策：本学キャンパスは広大な丘陵地に立地し、34 棟に及ぶ校舎が敷地全体に広がっている。そのため、高齢者や歩行困難な障害者等のキャンパス内の移動が厳しい環境であることに配慮し、これを改善するために、屋外にエスカレータ（2 か所）、エレベータ（2 か所）を設置している。また、校舎内のエレベータ設置と段差の解消、階段手摺の設置、トイレに障害者に対応した設備を整備している。今後も施設の整備において、バリアフリー化を念頭に置いて計画する。現在建築中の未来創造館（2020 年 12 月に竣工予定）は 4 階から 10 階部分は薬学部棟として整備する一方、1 階から 3 階は全学共用施設としてラーニングコモンズ、プレゼンテーションギャラリー、セルフスタディーコーナー、オープンコミュニケーションエリア、インフォメーションダイナー、自分未来活動エリアなどを設けて学生の利便性を確保する予定である。また、最上階の 11 階には、松永湾を一望できるカフェテリアと本格的な茶室を整備する予定である。これまでにも次の①～⑥に示す改善措置を実施してきたが、今後も学生生活アンケート等により学生の要望にも耳を傾けながら、長期的展望の下でさらなる改善を図りたい。

- ① 第一学生食堂及び第二学生食堂のリニューアル。
- ② 証明書等発行機を整備・増設し、福山駅前の社会連携推進センターにも設置。
- ③ 大学会館 2 階に喫茶室を整備。
- ④ スクールバス増便。
- ⑤ キャンパス内 Wi-Fi 環境の改善。
- ⑥ 大学会館ロビーにストリートピアノを設置。

提言(2)：細点検項目 2-5-⑤「施設・設備の管理において、防災・防火の観点から整備点検を行っていますか。」に対する達成度評価は 2.8 である。本学では安全衛生委員会及び危機管理への対応が進んでいるところであるが、施設・設備の防災・防火に関する整備点検については関係部局が学部等と連携して早急な対応が求められる。

改善方策：本学では、法令を遵守して学内校舎等の防火・防災設備を整備・点検している。また、安全衛生委員会を毎月開催し、問題を審議することで、学生及び教職員の安全・衛生を確保している。全学生を対象とした安否確認システムを構築して、災害等の発生に備えて安否確認訓練を実施している。令和元（2019）年 10 月には、巨大地震発生を想定した全学的避難訓練を実施している。令和 2 年度の新型コロナウイルス感染拡大防止のため、危機対策本部が設置され、適切な措置を取っている。危機管理マニュアルを作成して、全構成員が同マニュアルを共有するように努めると共に、同マニュアルの改訂作業を継続的に行っている。

提言(3)：細点検項目 2-5-⑦「学生及び教職員の安全確保のために、各部署に適切な安全管理教育の実施、災害時避難マニュアルの作成及び防災訓練等を実施していますか。」に対する達成度評価は 2.9 である。「福山大学 安全衛生管理の手引き」をはじめ「福山大学 危機管理基本マニュアル（第 1 版）」、「福山大学 自然災害対応マニュアル」等を刊行して、学部等で学生への指導と教職員の研修に努めているが、学部等は、関係部署と協働して学部等の環境や状況に合った個別の危機管理マニュアルや災害時避難マニュアルを作成し、個別の防災訓練等を早急に実施する必要がある。

改善方策：本学では、学校法人福山大学危機管理対応規程、学校法人福山大学危機管理規程、福山大学防火・防災管理規程、福山大学防火・防災管理委員会細則、福山大学消防計画等の諸規程等を定めている。これらの規程等に従い、「福山大学 安全衛生管理の手引き」、「福山大学 危機管理基本マニュアル（第 1 版）」、「福山大学 自然災害対応マニュアル」、「福山大学 感染症発生時対応マニュアル」を作成して学部等が共有している。これらを所轄する安全衛生委員会（委員長：学長補佐（総務担当））には、全学部長及び研究科長、研究センター長が委員として参画しており、学部等の連携態勢は整備されていると判断している。学部等が個別の危機管理マニュアルや災害時避難マニュアル等を作成するには関連規程の整備が必要であるが、各部署の規程等は定められていないため作成していない。学部等のローカルルールを作成するのではなく、全学のマニュアルを充実させる方向で検討したい。学部等の安全衛生マニュアルは学部等に作成を指示・作成済である。個別の避難訓練は、コロナ禍のため学生の参加が困難であるため、令和 3（2021）年度以降の課題としたい。

提言(4)：細点検項目 4-2-①「当該部署の教育目的及び教育課程に即した資質を有する教員を配置していますか。また、当該部署の適切な運営及び継続性を担保する構成（性別、年齢、職階等）となっていますか。」に対する達成度評価は 2.8 である。この点検項目について問題を抱える当該組織は改善に向けた努力を継続する必要がある。

改善方策：本学では教員の採用について、学部・学科から毎年 4 月末に提出される要望書を精査して適切に決定している。教員の性別割合は女性教員の割合が低い。その是正のために、男女共同参画を推進し女性比率の向上を図り、教育研究に関する業績と能力が同等と認められた場合には、女性を積極的に採用している。平成 31（2019）年度に行った令和 2（2020）年 4 月採用人事では、女性教員の採用を大幅

に増加させている。教員の年齢構成については、一部の学部・学科では高齢者の割合が高く深刻な問題となっていることを認識している。しかし、早急な改善は難しく、今後の中長期的計画の下でバランスのよい年齢構成となるよう努力する。一方、教員の職階については次のように対応している。教員の教育、研究、社会活動等の業績を客観的に評価するループリックを作成して評価するとともに、学生による授業評価アンケートを実施している。これらの評価結果を数値化して教員の昇任人事等に活用しているところである。また、昇任の遅れている助教や講師について学部等に指導計画の提出を求めている。これらの仕組は適切な職階を構成するために機能していると考えており、今後も継続させる予定である。

提言(5)：細点検項目 4-4-①「研究に専念する時間の確保、研究室の施設設備の整備等の研究環境を適切に管理していますか。」に対する達成度評価は 2.7 で全細点検項目の中でワースト 2 位であった。研究時間の確保が難しくなっている状況とその原因の一端を、学部等の自己点検・評価報告書の記述からうかがい知ることができる。大学の主な役割である教育・研究を踏まえ、大学として教員の研究環境を不斷に改善していく必要がある。

改善方策：この点検項目については昨年度の提言でも指摘されており、ICT の活用による業務の効率化で改善を図ると回答している。ところが、平成 31（2019）年 4 月から働き方改革を推進するための関係法律が施行され、政府は働き方改革を推進している。中でも労働基準法第 36 条等の改正により教員の労働時間の自由度が著しく制限されるようになり、本点検項目の達成度評価が低くなったと推定される。本学は法令遵守を第一としており、教員が教育・研究に費やす時間を制限せざるを得ない。しかし、関係当局との折衝を経て、研究活動を労働時間外の自主研修として扱うことで、一定の時間を研究に費やすことができるよう配慮している。

提言(6)：細点検項目 6-2-②「IR（Institutional Research）等を活用した十分な調査・データの収集と分析を行っていますか。また、その結果を改善に活かしていますか。」に対する達成度評価は 2.6 で、全細点検項目の中でワースト 1 位であった。IR 室の活動は始まったばかりで、この点検項目については学部等においても模索中であると考えられる。大学としての IR の活用方針、IR 機能の構築においてどのような情報を何によってどうやって分析するのか IR の具体的な運用について明確にし、学部等との共有・協働が必要であると考えられる。

改善方策：IR 室発足から 2 年目の平成 31（2019）年度は、データ収集に関する業務及び IR 活動を全学に周知する取組を行った。しかし、大学運営や戦略的意思決定に関するデータの分析はまだ未着手である。そのような中でも、データ収集に関しては、データキャビネット Karin の整備により、ユーザビリティの向上とセキュリティを強化した。そして、平成 29（2017）年度大学機関別認証評価に関するデジタルデータ、在学生の学生基本情報（学生の履修・成績、授業科目・シラバス、就職状況、入学志願状況など）に関するデータ等を収集した。また、各部局の意見を反映して「福山大学 IR 指標」を策定し、今後の IR 業務の基礎となる指標を Karin で公開した。令和 2（2020）年度からは、「福山大学 IR 指標」の中でも学生募集から卒業までのエンロールメントマネジメントにターゲットを絞って、具体的に大学運営や戦略的意思決定に関するデータの分析に着手する方向で活動している。一方、IR 活動を全学に周知する目的で IR ニュースを季刊発行（4 月、7 月、10 月、1 月）したほか、IRer 養成講座を 2 度（9 月、12 月）開催して、教職員との交流を深め、全学での IR 活動の必要性を理解してもらう取組を行った。令

和2（2020）年度もこのような広報・啓発活動を行う予定である。

第2部 2020年度 全学外部評価委員会の開催状況

2020年度福山大学全学外部評価委員会を2020年11月27日（金）に、福山大学 大学会館 3階 会議室において開催した。出席者にはマスク着用をお願いし、出席者の間にアクリル板を設置した上で、十分な間隔を確保して新型コロナウイルス感染防止に努めた。第2部では、外部評価委員会での外部評価員、及び本学出席者の発言を文章化して記録することにする。

記

◇ 開催日時：2020年11月27日（金） 13:30～16:30

◇ 開催場所：福山大学 大学会館 3階 会議室

◇ 出席者：本書5頁、6頁に記載

◇ プログラム

13:15 外部評価員 3階 別会議室集合 （スケジュール等の説明）

13:30 全学外部評価委員会 開始（進行：山本）

・学内出席者紹介

・外部評価員紹介

・大学概要説明（学長）

・2019年度福山大学自己点検評価結果の説明（実施小委員会委員長）

14:50 休憩（10分間）

15:00 全学外部評価委員会 再開

・福山大学への感想、意見、提言（進行：井内委員長）

16:30 全学外部評価委員会 終了

（1）委員長挨拶

井内委員長：ご紹介いただきました井内と申します。このコロナ禍の中で、外部評価委員会を開催するのは大変な準備だったと思います。私は広島大学医学部を卒業し大学院に残りましたので、広島大学の純粹培養で参りました。実は私の生まれは福山でして、父の生家は福山にあります。私は小学校の時に福山を離れましたので、福山のことはよくわかりませんが、「それゆえに委員長をやれ」ということかもしれません。皆様のご協力をお願いいたします。現在は広島市で病理学クリニックを経営しております。広島大学医学部在職時は病理診断を専門としておりました。広島大学退職後も何とか継続したいと思い、当時革新的な技術であったデジタル化により、ネット環境を活用して病理診断を行っております。研究や青少年の育成にも関わっていきたいと思っております。広島大学では1990年代から2000年代の広島大学改革の時期に大塚福山大学副学長とご一緒したことがあります、その時のことを覚えていらっしゃったよう

で、この度、委員長を拝命することになったと存じます。本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

進行者（山本）：次に福山大学の基本理念と概況、並びに大学改革の取組とその成果について、福山大学学長 松田よりご説明申し上げます。

福山大学の松田文子学長が、パワーポイントの資料に基づいて、福山大学の基本理念と概況、並びに大学改革の取組とその成果”について説明した。スライドを左ページに 6 枚ずつ配置し、その説明を要約して右ページに記した。本書では、編集の都合上、パワーポイントスライドのページにはページ番号を付していない。

（2）福山大学の基本理念と概況、大学改革の取組とその成果

＜スライド 1＞ 福山大学の基本理念と概況、並びに大学改革の取組とその成果”について説明します。

＜スライド 2＞ 1975 年に、福山大学は経済学部と工学部の 2 学部で始まりました。建学の精神として全人教育を行うことを掲げています。そして、創設者は、“三蔵五訓”という形で「こんな風に学びなさいよ。」と学生に示されました。

＜スライド 3＞ それが、現在では 5 学部 14 学科にまで発展し、いろいろな建物が建ちました。そして、建学の精神は堅持していますが、三蔵五訓の言葉が文語調で、今の子どもたちに合わないので、現代言葉に直し、さらに「地域社会の発展への貢献」を付け加えています（左下の「教育目的」）。ピンク色の円で示している部分は、現在建設中の未来創造館の場所を示しています。

＜スライド 4＞ 未来創造館は 11 階建ての建物で、1・2・3 階は全学共用の学生の学びのスペースです。4 階から 10 階は薬学部。11 階にはラウンジ、会議室、お茶室などを設備しております。未来創造館の竣工は 2020 年 12 月を予定しています。機会がありましたら、是非、おいでいただきたいと思います。

＜スライド 5＞ 本学は、『地域の中核となる幅広い職業人の育成』をミッションとして、未来を創り、地域から国際社会につながる未来創造人を育成しています。未来創造人を育成するのは大学だけで出来ることではなく、地域の皆様のご協力が必要です。

＜スライド 6＞ ということで、現在、本学は創設者の意思に基づき、全人教育はしっかりと堅持した上で、未来創造人を育む全人教育を行っています。その特徴はここに挙げた 7 つのことで、これらについて一つずつ説明したいと思います。

＜スライド 7＞ まず、第一に、人間関係をつくりながら学ぶ“目標設定型教育システム”が本学の教育の特徴となっています。三角形の一番下に配置した一つ一つの授業が、それぞれ小目標を持っており、真中あたりが各学年の中目標、そして卒業するときに身につけておいてほしい知識、技能、態度という大目

福山大学の基本理念と概況

×

大学改革の取り組みと成果

2020年11月27日
(全学外部評価委員会)

学長 松田 文子



福山大学公式ゆるキャラ
「福ちゃん」

描るきなく前進 !!



福山大学
FUKUOKA UNIVERSITY



1



福山大学
5学部14学科、大学院4研究科11専攻
(平成20年度(2008)～) (平成27年度(2015)～)
34万m²に34棟の教育研究棟

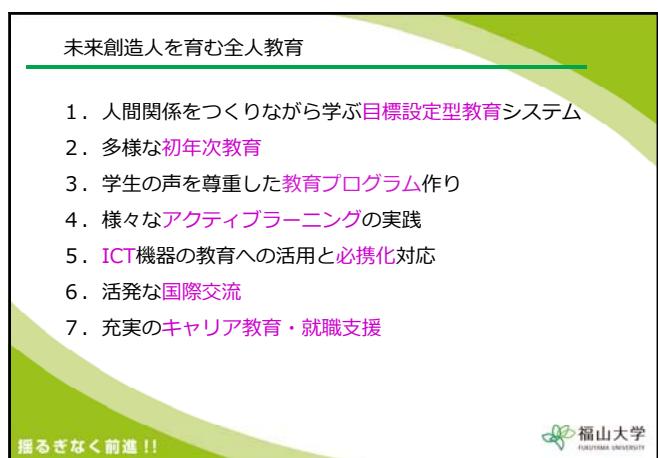
生命工学部
大学本部
図書館
グリーン
サイエンス
研究センター
大学会館
体育館
経済学部
人間文化学部
医学系教育センター
(図書館分館)
未来創造館
(本年12月21日竣工予定)
農学部
多目的運動場
サッカー場
野球場
女子寮
共同利用センター
社会連携センター
安全安心防災教育
研究センター
島田キャンパス
内海生物資源研究所



3

4

福山大学は、「地域の中核となる幅広い職業人の育成」をミッションとして、備後地域の産学官民連携を推進し、地域の教育資源を最大限に活用して人間性を高め、地域を愛し、地域で活躍し、地域から国際社会につながる **「未来創造人」** を育成します。



5

6

標、すなわち確かな学士力を示しています。教育に当たっては、教員が「何を教えたか」ではなく、学生が「何を出来るようになったか」ということをいつも問うようにしています。人間関係をつくりながら、自立 ⇒ 対話 ⇒ 社会参加 ⇒ 自己実現に進んでゆく。そういう教育プログラムをつくり、さらにカリキュラム・マップという形で視覚化して、教員と学生が共有しています。

<スライド 8> これは、人間文化学部 心理学科のカリキュラム・マップです。縦に、知識・技能・態度、横に学年を並べて、各学年に中目標を設定し、その中目標に合わせて授業科目を配置しています。そして、一番右側に卒業時に身につけておくべき知識・技能・態度を示しています。このようなカリキュラム・マップをすべての学科について用意しています。

<スライド 9> 次に、多様な初年次教育です。大学での学び方を学ぶという、大学での学びの基礎づくりを初年次教育で行います。また、本学では入学式の後、新入生合宿オリエンテーションを実施しています。残念ながら本年度はコロナ禍のため中止となりました。ここで、上級生と交わり専門教育の端っこをちょっとかじる、レクリエーションを楽しんで、入学生・上級生・教員が交流を深めるなどしています。さらに、“教養ゼミ”という科目を大切にしています。人間関係づくり、学修スキルを修得します。また、教養講座を年に5回ほど開催しています。教養講座にはノーベル賞授賞者などの一流の講師を招聘して、一流に触れる機会を設けています。こういう教養教育、キャリア教育、共通基礎教育を土台にして専門教育に進んでいく形をとっています。

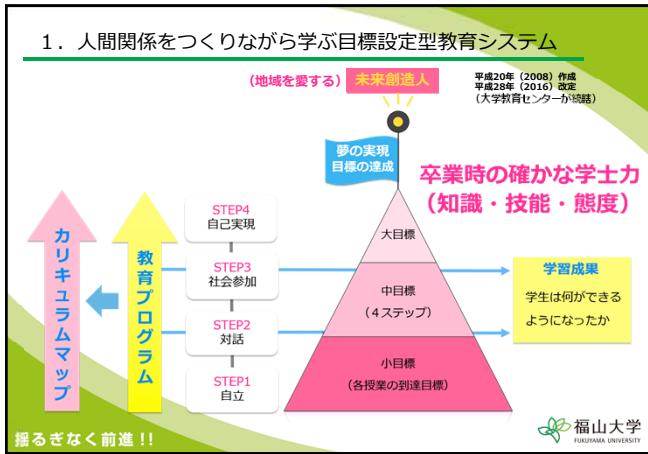
<スライド 10> 3番目に、学生の声を尊重した教育プログラム、教育システムです。本学では担任制をとるべき細かい指導をしています。右に示しているのは、苦手な教科について個別指導をしてもらえる学修支援室です。上に示している時間割のようなものは、何曜日の何限目に来ればどの先生が何についての個別指導してくれるという時間割です。また、学生の声を聞くために、いろいろな話し合いの場の設定やアンケートを実施して、それらを教育プログラムや教育施設に活かすことを心がけるようにしています。

<スライド 11> 学生の声を尊重した教育プログラムづくりの成果として、ゆっくりではありますが、退学者数、退学率が減少傾向にあることが挙げられるでしょう。退学というのは本人にとっても、大学にとってもマイナスです。よい教育の成果は退学率の減少というところにも出てくると思っています。

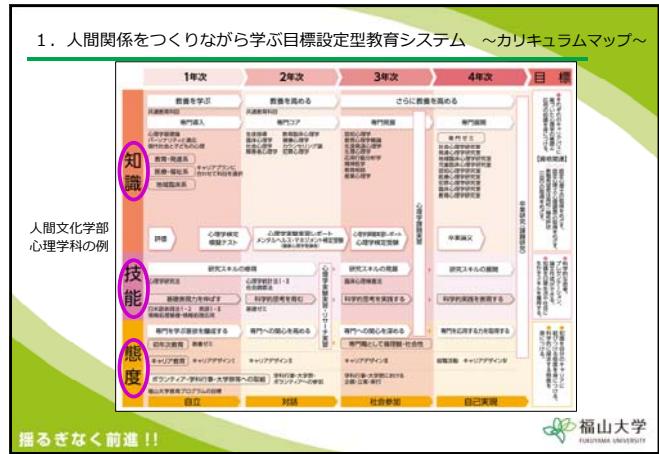
<スライド 12> スライド配置の関係で、スライド12は空白としています。

<スライド 13> 4番目に、さまざまなアクティブ・ラーニングを全学科で行っています。アクティブ・ラーニングは、教員が一方的に講義をするという授業の在り方とは反対で、学生が主体となって様々な活動をしながら学んでいくというものです。

<スライド 14> 大きなプロジェクトや研究の枠組みの中でも、アクティブ・ラーニングを行っています。本学では全学的に「瀬戸内の里山・里海学」の構築に取組んでいまして、その研究プロジェクトの意



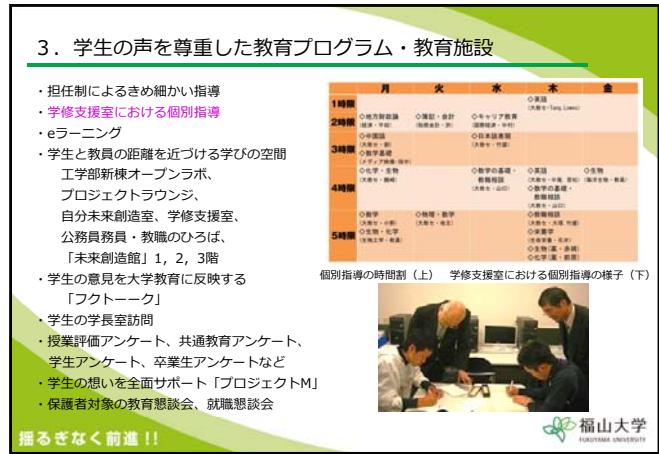
7



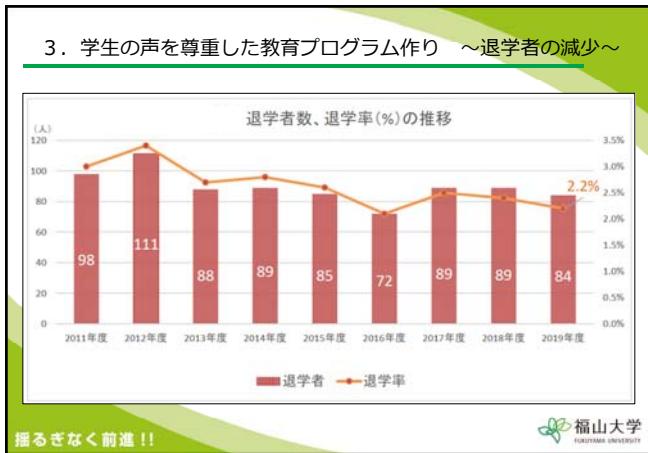
8



9



10



11

説明文とスライドの配置の
関係上、空白としています。

12

2

義・目的は、瀬戸内自然共生文化圏の構築という壮大なものです。この中に学生が教員を引っ張るくらいの勢いで参加しており、プロジェクトへの参加が学生のアクティブ・ラーニングにもなるという状況です。

<スライド 15> そのアクティブ・ラーニング、研究プロジェクトでも成果が出てきています。ここでは、六次産業化に結びついている 2 つの例を紹介します。シロギスは 25 cm くらいの大きさになると“テッポウギス”と呼ばれて、一気に商品価値が高くなります。しかし、普通にはなかなか大きくなありません。それを卵からの養殖技術を開発してテッポウギスにまで育てる、六次産業化が進んでいます。沖縄の伊平屋島でもこれを進めています。この水槽でシロギスを養殖しているのですが、毎日餌を与えなければなりません。AI を活用して給餌を自動化すべく工学部の学生が取組んでいます。昨年度末の国際学会でこれを発表した 4 年次生が賞を受賞しています。

<スライド 16> もう一つ紹介します。これは皆様の目にも時々入っているかもしれません、ワインです。福山市はバラの街で、バラの花から分離した酵母でワインづくりをして、それがいまや備後福山ワイン振興協議会に発展しています。福山市の方々、福山商工会議所の方々にも大変協力いいいただいております。このバラの酵母菌をパンや清酒づくりにも取り入れています。バラの香りのする日本酒ってどんな風味なのでしょうね！ 楽しみにしています。

<スライド 17> 次に、ICT 機器の教育への活用と必携化対応です。“BYOD”、Bring Your Own Device の頭文字を並べた言葉です。みんな自分の端末を持ちましょう。Device を持ちましょう。それをさかんに推奨してきたのですが、なかなか進みませんでした。しかし、皮肉にもコロナ禍により ICT 関連の施設、設備が充実し、BYOD も一気に加速しました。教員も一所懸命勉強して、BYOD に対応した教授法を開発してくれています。

<スライド 18> 6 番目は活発な国際交流です。福山大学では国際交流を積極的に行ってています。7 か国の 27 大学と大学間協定を締結しています。通常の年ですと、海外から 170～180 人の留学生が本学に留学して学んでいます。また、本学からも 70 人～80 人が海外に留学しています。

<スライド 19> さらに、福山市の事業である官民協働海外留学支援制度「トビタテ留学 JAPAN」というプログラムを産学官で進めています。地域の企業でのインターンシップを組み合わせて海外留学するというユニークなプログラムです。計画した構想が良くないと派遣されないと、競争の厳しい事業ですが、本学学生はプログラムが始まってから毎年 5 名が行かせていただいており、地元企業の皆さんにも大変お世話になっております。

<スライド 20> 7 番目はキャリア教育と就職支援です。授業科目としては 1 年次生の時から 4 年次生まで、キャリアデザイン I から IV を配置しています。3 年次生でインターンシップに行く学生が多いのですが、“BINGO OPEN インターンシップ”を本学が中心となって行っています。このオープンというのは備後地域の他の 3 大学にも開放しているという意味です。インターンシップも非常に丁寧に指導して

実施しています。これも地域の企業の皆様に大変お世話になっています。下のグラフに示すように、参加する学生は年々増えておりましたが、コロナ禍のために今年は一気に縮小しています。

<スライド 21> グラフ中の一番上の青い線で示すように、こういうキャリア教育、就職支援により、本学の就職率は最近 7 年～8 年ほぼ 100% を誇っています。全国平均や広島県の平均をかなり上回っています。

<スライド 22> 本学では、このような教育の成果を、卒業時に自分たちの成長を自己評価する卒業生アンケートを実施して調査しています。この横棒グラフの左側の赤が“かなり向上しました”、橙色が“少し向上しました”、ということで、多くの学生が向上したと感じているのですが、問題は緑や茶色の“変わらない”“低下した”と回答した学生の割合がゼロではないということです。まだまだ私たちの努力が必要です。

<スライド 23> そして、大学の改革の成果は入試の志願者数、入学者数の増加という形でも現れています。各年度の左の青色のバーが入学定員、その隣のピンク色のバーが志願者数を示しています。志願者数は年々増えています。そして右側の緑色のバーが入学者数で、入学定員充足率も 95% 近くまで回復してきました。しかし、少し頭打ちになってきました。もうひと頑張り、方法を変えて頑張らなければなりません。この点についても先生方のお知恵をぜひ拝借したいところです。

<スライド 24> 今後とも搖るぎなく前進していきたいと思っております。これからは難しいことも多くなってくると思いますので、ご意見をいただければ幸いです。どうも有難うございました。

以上です、ご清聴いただき有難うございました。

(3) 福山大学の自己点検評価活動について

福山大学の自己点検評価活動の概要、及び令和 2019 年度自己点検評価結果について、全学自己点検評価委員会 実施小委員会の坂口勝次委員長が、本書 4 頁～29 頁の資料に基づいて説明した。委員会に置ける坂口小委員会委員長の説明は、本書 4 頁～29 頁の内容とほぼ重複するため、本書では省略した。

坂口小委員会委員長からの説明に引き続いで、以下の通り、質疑応答があった。

山 本： 坂口実施小委員会委員長から、福山大学自己点検評価活動、及び 2019 年度自己点検評価結果を報告させていただきました。ご意見、ご質問、ご不明の点がございますか。

井内委員長： 評価についての確認ですが、約 40 に及ぶ部署がそれぞれ自己点検評価し、それを点数化して平均値として大学全体の評価としていますが、ただ数値だけになってしまい、各部署や教員それぞれのニーズや思いが反映されているのでしょうか。

6. 活発な国際交流

福山市等との官民協働海外留学支援制度「トピタ留学JAPAN地域人材コース」2019年度参加学生

参加学生	留学のテーマ、留学期間、留学先	インターンシップ等で お世話になった企業
経済学科 3年次生	テーマ：「福山におけるスポーツツーリズム産業の新たな可能性」 留学期間：2019年8月10日～2019年9月15日、2020年2月17日～2020年3月19日 留学先：①カリフォルニア大学リバーサイト校※、②アルビレックス新潟シンガポール	山陽染工(株)
国際経済学科 3年次生	テーマ：「サンフランシスコでリノベーションボランティア」 留学期間：2019年9月4日～2019年10月4日 留学先：米国セント・シャイアーズ・サンフランシスコ校	(株)サン・クレア (Oriental Hotels)
国際経済学科 2年次生	テーマ：「福山のバラを日本、世界に飛ばす」 留学期間：2019年9月27日～2020年3月16日 留学先：ソフィア大学※	SRホールディングス
人間文化学科 3年次生	テーマ：「アメリカで学ぶ親教育と子育て支援」 留学期間：2019年8月23日～2019年10月15日 留学先：カリフォルニア州立大学サンマルコス校※	エブリイ
海洋生物学科 2年次生	テーマ：「海に学ぶ！自然のすばらしさ、環境の大切さとブルーエコノミー」 留学期間：2019年8月23日～2019年10月15日 留学先：カリフォルニア州立大学サンマルコス校※	日東製糖

注：※は本学の海外協定大学

前年度も5名（国際経済3、生物1、海洋1）が参加

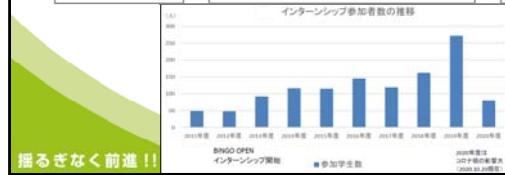


揺るぎなく前進！！

19

7. 充実のキャリア教育・就職支援 ～インターンシップ～

- 授業科目：キャリアデザインⅠ～Ⅳ
- 各種資格取得のための検定試験受験指導と費用の全額・一部を補助
- 備後3大学・広島県や福山市との協力関係を強化し、本学の教育理念に基づく“BINGO OPEN インターンシップ”事業を展開



20

7. 充実のキャリア教育・就職支援 ～就活支援と就職率～

2018年度実績

- ・合同企業説明会
- 年間11回実施
延べ参加企業数1,185社
延べ参加学生数2,261名
- ・保証人のための就職懇談会
- 出席者数264名
- ・卒業生による業界説明会
- 68業者129名
参加学生数180名
- ・就職ガイダンス
- 年間8回実施
参加学生数2,893名
- ・就職支援システム(ゼロコバ)
・経験豊かな就職支援スタッフ
(国家資格・1級キャリア
コンサルティング技能土保有)

高い就職率



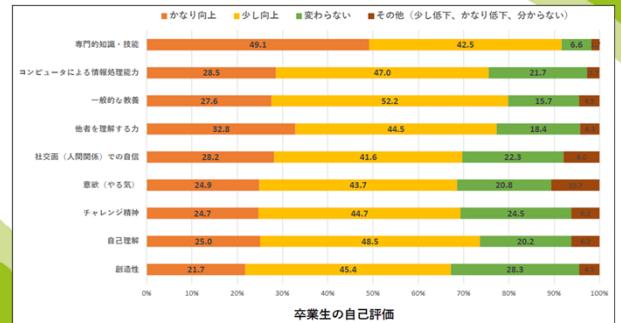
これらに加え、企業との連携促進のため「企業懇談会」を毎年開催
企業等の代表者や採用担当者の方々をお招きし、福山大学（+福山平成
大学）の教職員と情報交換を行うためのもの。
2018年度は346社から376名がご参加

揺るぎなく前進！！

21

未来創造人を育む全人教育の成果 ～卒業生の自己評価～

卒業生の自己評価

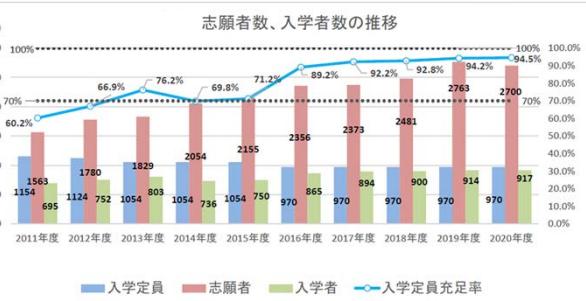


（大学教育センター教育開発部門「令和元年度卒業生アンケート」結果から）



揺るぎなく前進！！

未来創造人を育む全人教育の成果 ～入学者数等の増加～



2018年3月6日 日本高等教育評価機構より「大学評価基準に適合」との認定

揺るぎなく前進！！

揺るぎなく前進、福山大学

- 教育と学生指導を、学生一人ひとりに合わせて
- 研究の活発化、研究プロジェクト「瀬戸内の里山・里海学」推進
 - 学生・院生増、授業の魅力化、地域連携増、地域における福山大学の信頼増・存在感増
- 地域連携・社会貢献→学生のアクティブ・ラーニングの場、福山大学の信頼感・知名度の向上
- 大学の魅力増とその効果的な発信（学長室ブログ）



少子化に負けず、入学定員充足、収容定員充足



23

24

坂 口： すべての部署（学部等自己点検評価委員会）がすべての点検項目について点検しているわけではありません。学部・学科はすべての点検項目に対して点検していますが、点検項目毎に該当する部署と該当しない部署があります。例えば研究センターなどでは教育内容の点検のように相応しくない点検項目もありますので、必ずしも全部の部署が点検しているわけではありません。それぞれの部署の思いが反映されているのかという点については、現状説明や現状報告、改善課題などを文章で記載する欄もございますので、それらの思いを汲取るように努力しているところです。

山 本： 私から補足させていただきます。自己点検評価の結果は、本学の改革推進委員会に報告するのですが、ご質問の点は本学理事長から「数値だけで表しているが、具体的な情報が報告書から読取れない。研究環境の整備や学生のアメニティなどの改善に向けて、できることから着手しているが、さらに積極的に改善策するためには、もっと具体的に示してほしい」という苦言をいただいており、次年度からこの点を改めたいと考えているところです。

井内委員長： 精緻な検討をされているので感心していますが、学生関連の点検は教員側の立場から見たものであって、受益者である学生の立場での点検となっているのか少々気になります。

山 本： 本学自己点検評価の点検項目は教員の立場からの点検となっています。しかし、学長の概況説明にもありましたように、学生生活アンケートなどの種々のアンケートを実施して学生の声や要望を聞いています。学生の要望に応えると共に、自己点検評価に反映できるようにしたいと思っています。

小葉竹委員： 目標の妥当性と年度目標に対する達成度の評価について伺います。行政でも年度目標を設定しているわけですが、その評価は難しいですね。年度目標の立て方について福山大学では目標を高く設定したいということですが、その年度目標の妥当性とそのオーソライズはどうにされているのでしょうか。また、目標を定量的に設定しているのか、定性的に設定しているのかについては、どのように考えればよろしいでしょうか。それと目標達成度を年度比較されています。そのときに年度目標が変わっていた時にどのように判断されているのかについて伺いたいと思います。

坂 口： 年度目標の設定は、絶対目標ではなく、その目標達成に向けて何ができるかを設定しています。実施小委員会のコメントなどをフィードバックしていますが、達成度評価の標準化はできていません。2つ目のご質問については、次年度の目標が前年度目標から変化している場合もありますので、年度間で達成度を比較することは、ご指摘通りで、今後の改善課題となっております。

小葉竹委員： 行政でも目標の設定とその達成は大変難しい課題ですので、質問させていただきました。有難うございました。

この後、約10分間の休憩をとり、外部評価員の皆様からご意見をいただいた。

(4) 外部評価委員会での福山大学に対する感想・意見・提言

山 本： それでは、外部評価委員会の後半では、外部評価員の皆様より本学に対するご感想、ご意見、ご提言を賜りたいと存じます。福山大学が皆様からご意見等をいただきたい項目をパワーポイントで示しております。列記した事項の順に関わらず活発なご意見をいただきたく存じます。ただし、福山大学の3つのポリシーに対するご意見等は、すべての討議を経た上で、最後になろうかと思います。後半については、井内委員長に進行をお願いいたします。

井内委員長： それでは、ご指名でございますので、今、パワーポイントで示されているような内容について委員の方からご意見をいただきたいと思います。私はこれを見たときに、項目を大きく2つくらいに分けて、1つ目は学外から見た福山大学のイメージ、地域等の学外から見て福山大学はこういうふうにあってほしいとか、こういうものであるべきだとか、地元の皆様には福山大学のあるべき姿というものがあるかと思います。そこで最初に「学外から見る福山大学のイメージについて」「地域の中で福山大学が果たす役割について」を合わせた感じで伺いたいと思います。その後で2つ目の「地域社会が求める人材育成」「福山大学の研究・開発等」を合わせて伺おうと思います。

そして、最後に福山大学が掲げておられる3つのポリシーに対するご意見を伺いたいと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。

それでは最初に福山大学に対するイメージや福山大学にこうあってほしい、こういう役割を果たしてほしいと思われていることをそれぞれのお立場からご意見をいただければと思います。まず、経済界の方からのご意見をいただければ、話が弾みやすいかと思いますのでよろしくお願ひします。

福山大学に対する感想・意見・提言

- ・学外から見る福山大学のイメージについて
- ・地域の中で福山大学が果たす役割について
- ・地域社会が求める人材育成について
- ・福山大学の研究・開発等について
- ・福山大学教職員・学生の社会連携活動、
社会貢献について
- ・福山大学の3つのポリシーについて
- ・その他

柿原委員： 今日は有難うございます。すごいエネルギーをかけられて自己点検評価されている。せっかくあれだけのアンケート等をされておりまますので、ぜひ新しい福山大学になるように我々も協力していくたいと思っていますのでよろしくお願ひします。

まず、福山大学のイメージが私も明確ではありません。私の会社に在職する福山大学OBを数えますと10人おりまして、それぞれ活躍されております。経済学部OBが9人、工学部OBが1人です。その中でも会社の中心となっている人が6人おり、大きな役割を果たしていただいております。皆さん非常に頭がよいのに生かし切れておらず、もったいないという思いもあります。これは福山大学のイメージ

というよりも、私共の会社に勤めておられる人のイメージですが、非常にまじめで仕事も熱心にしていただいている、ありがとうございます。福山大学と企業の関係で、少し感じることは、福山大学には立派な教授の先生方がたくさんおられると私自身は感じておりますし、地域の中小企業では相手として物足りなく感じているような気がします。物足りないという言い方はおかしいのですが、福山地域にある大学として、これまで何十年にもわたって貢献していただいているのですが、これからも地域を引っ張っていただきたい大学になっていただきたい。そのために私共が物足りないと思うことは、もっと地域経済や福山市とも交流があつてもよいのではないかという感じがしております。先ほどの自己評価（自己点検評価の報告）を伺つても、たいへん努力されていることもよくわかりますので、大いに期待できるはではないかと考えております。これからも地域のために頑張っていただきたいと思います。

井内委員長： 有難うございました。次は木下委員からご意見を伺いたいと思います。

木下委員： 柿原委員と同様に、私どもの会社にも何人かの福山大学卒業生の方がおります。正確には何名かはわかりませんが、福山大学卒業生が複数名おります。私は（福山大学近くの）今津町で育ち、今津に会社があります。今は（福山市の）西町なのですが。福山大学は私がちょうど 15 歳の時、1975 年の創立でして、福山大学の 3 期生あるいは 4 期生として福山大学に入学した私の同級生がたくさんおります。地元の大学ということで意識をしていたのですが、今日、初めて三蔵五訓や全人教育という精神を知るに至って、地元の大学でありながら、それを知らなかつた自分を反省しております。こういう背骨にあたる部分をもっともっと外に向けてアピールしていただければ、福山大学の存在が明確に出るのではないかという気がします。これから少子化が進んでいく中で、どう存在をアピールするのか、建学の精神、三蔵五訓などの背骨にあたる部分、曲げられない部分をアピールして存在意義を高めていただければと思います。あと、就職等々については後程にします。

井内委員長： どうも有難うございました。地元の方からよく知らないと言われるのは困ったもので、是非広報していただければと思います。それでは続きまして古前先生の方から、学校からみて、福山大学のイメージについてお話をいただけるでしょうか。

古前委員： それでは高等学校を代表して、お話をさせていただきたいと思います。この福山の地域には高等学校が 18 校あるのですが、毎年大勢の学生を受け入れていただいている。福山大学の開学以来ずっとですが、この福山を中心に大勢の生徒が入学させていただいているし、県全体に広げてもかなりの数の生徒を毎年受け入れていただいている。そういう中で、大学の果たす役割として高校と大学との交流が挙げられます。いま、小・中の接続、中・高、そして高大接続改革の方針が国から出されています。高等学校と大学が連携することはとても大事だと思います。それがどういう形で何をするのか、ここですぐに具体的に出てきませんが、それは年に何回かは交流する機会もあると思いますし、していますので、教育の交流をするということがあつてもよいと思います。入試の説明だけでなく、いわゆる今の大學生の入学した時の姿を見て、高校ではどのような力を身につけさせておかなければならぬのか、ということは大学に聞かなければ分からぬこともあります。

悪いのですが、高校は卒業させたら、それで終わりという面がどうしてもあります。今、まさに学び

の変革が全国で取組まれ、当県でも取組んでいますけれども、松田学長の説明にもありましたように、今は修得主義であります。大学で1年間学ぶ1つの科目を学ぶことを通して、出来てなかつたことが出来るようになる、何が出来るようになったのかが求められるということは、高校も一緒です。大学も変わっていますし、修得主義が中心となって、授業を変えないといけない。それは大学も高校も同じで、深い学び、かつてのアクティブ・ラーニング、課題発見・解決型学修だと言われている訳で、そのような流れの中で、高校と大学が学ぶということについて、連携するというようなことがあってもいいのではないか、必要がありはしないかと私は思っています。国の要請を受けて、これは経済界の要請を受けてのことだと思いますが、大学の教育を変えないといけない、と始まったのが学びの変革で、それが高校にも中学校、小学校にも降りるようになっているわけですが、今からの学びをつくるという上では大学だけでできるものではないのであって、高校でもやらなければいけないと思っています。高校でも頑張っていますが、なかなかうまくいきませんけれども、そういうことが必要であると思っています。松田学長の説明の中に初年次教育というのがありましたけれども、高校でも高校1年生の指導、ここが全てなのですね。入口のところ、ここを失敗すると後が伸びないと私はずっと思っています。大学もやはり同じで、高校生を大学に受け入れている訳ですけれど、1年次の時の入り口のところで半年、あるいは1年間の指導をどうされるかというのが結構大きいと思います。別の言い方をすれば、学び方を学ばせる、学問への向き合い方を学ばせる、高校での足らない部分をどのように補うか、といったことについては連携しないと難しいところがある。我々としても十分な力をつけて大学へ送り出す、あるいは社会へ送り出すということが責務だと思いますけれど、だからといって回避しているわけではありませんけれども、そこは互いにすり合わせて意見を交わして、交流する場が“学び”ということを中心にあればいいと思います。（自己点検評価書の）28ページにありましたように、働き方改革の中で、そういうイベントを一杯いっぱいやりますと、研究する時間が無くなるということにもなります。バランスということありますが、実現が可能か不可能かは別としても、高校側としては大学の先生方と“学ぶ”ということを中心とした交流、ワークショップでもいいし、何でもいいと思いますが、そんなことがより充実してゆけばよいと思っています。

井内委員長：有難うございました。アウトカムベースのラーニングというのでしょうか、履修の数だけ並べて先生の方も教えたと思っている。私も同感です。私も医学部の中でそういうことをずっと言ってきたのですが、受身であってはいけないアクティブにやれと言ってもなかなか出来なくて、高校の先生も大学の先生も同じ方向を向いて指導していくための協議とか話し合いをすれば、そういう学び方を若い人達が身に付けてもらえるのではないか、とおっしゃっているのだと思います。全く私も同感です。かなり時間がかかる、大変なことですけれども、ぜひやっていただきたいと思います。そういう学生たちが卒業してくるというイメージを福山大学でもあっていただきたいと思います。ただ、単に学力が高いとか頭がいいとかだけでなく、そういう形で学んでくれる子がいるといいと思います。

それでは今度は福山市の立場で小葉竹委員（市民局長）からお話をいただきたいと思います。

小葉竹委員：私の担当している仕事は大変多くて、色々な場面で福山大学の先生そして学生の皆さんにお世話になっています。先ほど学長からご紹介いただいた、“トビタテ留学 JAPAN”も担当していますし、バラも担当しておりますし、オリンピックの関係、スポーツの関係も私どもが担当しています。い

ろんな場面で今年は数えたら 16 ございます。いま、経済界の方から少し慎重ということはむしろ我々の責任かな、と反省をいたしているところです。私の方で考える福山大学について一番大きなところは、これだけの人数の大学生が福山に全国から来られているということです。今、人口減少の時代の中で福山からどんどん若者が流出している状況があります。そういう意味ではこの大学がダムになって頂いているのだというふうには思っております。社会連携活動にも関わってくるのですが、特に松永地域、福山市西部地域において、福山大学の先生とか学生がかなりの活動していただいている。プロジェクト M という活動も行っていただいていると伺っていますし、この辺りのビッグサマーストーリーとか大きなプロジェクトにもどんどん参加していただいている。そういう意味では、地域の中で果たしていただいている役割も大きいと思います。人口減少の中で、福山市として本当に考えないといけないことは、地域の街づくり、コミュニティーを如何にしていくか、といった大きな流れがございます。高齢化が進み人口が減って、周辺地域では担い手がいなくなっていく、そこを踏まえまして、福山市でもどのようにして担手を確保していくのか、地域を運営していくのかということをやっているのですが、学生の方とか先生にお教えをいただきながら、単なるイベントではなく地域の振興のために何かお力を貸していただけないかと思っています。なかなか難しい話なのですが、担当セクションとしてお願ひしたいと思っています。

もう一つ、私の担当の中に多文化共生がございます。留学生はこの地域では福山大学にしかいないのではないかと思いますが、多文化共生を進めていく上でいろいろ知見をいただきたい、逆に福山市が出来ることを教えていただきたいといった意味でも期待したいと思います。そういう意味で市行政を支えていただくという意味でもよろしくお願ひしたいと思います。

井内委員長： 有難うございます、市の立場で地域の振興についてのご意見をいただきました。それでは教育委員会の方から佐藤委員にご意見をいただきたいと思います。

佐藤委員： 佐藤でございます。教育委員会の立場から少しお話させていただきます。先ほども大学の取組の説明の中にもありましたように、いま教育が大きく変わっていく。義務教育段階の子どもたちが大学に目を向けることはちょっと時間が空いているので、そのところは非常に難しいのですけれども、福山市立の高校もございます。進路指導の方から探求講座ということで、大学から出張で講義をしていただくこともあります。高校生にとってもやはり進路というところにつながりますので、大学のいろんな研究、知の殿堂という所で子どもたちが知見を深めてゆくという機会にさせていただければと思っています。教育段階、義務教育から大学へ目を向けるところは、福山大学でされている研究、その成果、そういうものを、分かり易く義務教育段階の子どもたちに伝えていければと思っております。

もちろん、大学の方でも研究成果を十分に発信されていると思いますけれども、大学での研究、そしてその成果を子ども向けに少し噛み砕いて子どもたちに発信していただくことができるのであればお願ひしたいと思います。これから子どもたちが自分で力をつけていくというか、目標として大学の研究が 1 つのきっかけになればと思いますので、よろしくお願ひします。

井内委員長： どうも有難うございます。要約すれば、この大学で行われている素晴らしい研究を噛み砕いて分かり易くすれば、そういうことが（福山大学を）イメージができるようになるということでしょう

ね。

最後に私の意見です。大変申し訳ないのですが、広島にいる若い人たちに、「福山大学はどんなイメージですか」聞いても、何も出てこないのです。それはある意味では広島にはたくさん大学があって、目立つ大学がすごく広報が上手なのですね。例えば具体的な実名を出して悪いのですが、安田女子大学。女子だけで頑張っている大学で、6学部14学科を持っていて女子大として全国一だとPRする。広報するのですね。広島市内の女子高校生に聞いても、安田大学が希望と言う子どもが多いですね。やはりブランドづくりが大切だと思います。もう1つ、ノートルダム清心女子大学という大学があります。昨日の日経新聞にブランドイメージ調査が掲載されていましたが、この中で、この中四国地方で最も上品で軽が良いというイメージだそうです。私の知っているあの大学の学生が全部そうだとは全然思わないのですけれど、こういうイメージがつくられていることは間違いないですね。そうすると子どもの親御さんたちの選択肢に入ることになるだろうと思います。

もう1つの例として、広島経済大学を上げます。これも後発の大学なのですけれども、何が目立っているかというと興動館を担当している教員が友達だったものですから聞いたのですけれど、学生たちにクラブ活動と同じようなものとして興動館に入れるのですね。興動は、アクティブという意味だと思いますけれど、国際交流のアイデアを出させたり、自分たちで企画させたり、非常に明るいイメージが多くて、広島では非常に躍動している大学というイメージをつくっているのですね。これはイメージですからみんながそうだとは思いませんが、そういう一部の学生の行動をうまく広報する。やっぱり、私立というのは何かを売りにしないといけない。多分イメージをつくるということはとても大切であると思います。この地域では福山大学は存在感があると思いますが、広島の西に住んでいる我々からすると「福山大学ってどんな大学？」と聞かれても何も出てこない人が多いのです。私は大学をリタイヤした人間ですけれども、私のように大学に関係していてもなかなか出てこない、というのが正直なところです。私に、福山大学のイメージについて述べろと言われて「何もない」という味もそ分けもない応えをしてしまって大変申し訳ないのですが、ぜひイメージをつくっていただきたい。今回、資料をいただいて勉強させていただくと、ワインづくりもですし、里山・里海学もそうだし、とっても面白いことをたくさんやってらっしゃる。そういうもので何とかブランドイメージを作っていただきたい。そういう戦略的なやり方というものを、これから18才人口が減っていくという厳しい大学の状況では、ぜひとも必要なものではないか、上手い広報を、それを是非、戦略的にやっていただければいいのではないか、という気がしています。

今の福山大学のイメージとか、福山大学の地域の役割とかについて、何か追加で意見をいただける委員の方はいらっしゃいませんか？よろしいでしょうか。

それでは次のテーマに移ります。内容的にはオーバーラップしているので、自由に話していただければと思います。

それでは先ほど私が2つ目のテーマとした「地域社会の求める人材」とは何だろうか、それを外部の人間がどう思っているのか。それから、人材だけでなく福山大学に研究をしてほしい、リソースがほしい、何かを開拓してほしいということを福山市や経済界も思っておられると思います。そういうことをもう少し掘り下げてお話ししていただきたいと思います。それに関係して教職員の方には近くにいてほしいとか、高名な先生がいらっしゃるのに、そういう実感が全然ないとか、学生さんも社会貢献やボランティアでもっと福山市の中で存在感がほしいとか、そういう形でのご提案だと思います。この辺りのことを

経済界の柿原委員からありますでしょうか。

柿原委員： 全体を聴いておりまして、せっかく素晴らしいことをされているのに、ちょっと情報発信が足りないという感じを受けました。先ほどのお話を伺いましてもアクティブ・ラーニングとかすばらしい課題を持ってチャレンジされていますので、その辺りを上手く活用させたらよいと思います。それで何となくですが、わりと冒険心というのかチャレンジ精神がちょっと乏しいというか、もっとめちゃめちゃにやっていただけたらと思います。例えば今、福山市では福山駅前が大変大きな問題になっておりましますし、福山城築城 400 年を迎えることなど、いろいろな事が目白押し、鞄の方もいよいよトンネル工事が始まるようでございますが、そういうイベントといいますか、地域活性化の提案をしていただき、実施もしていただくことも我々としても期待しております、学生だけでやるのもなかなか難しいと思いますので、おそらく福山市も商工会議所も受け皿を作つて一緒にやって行きたいと思っていると思つてはいるので、元気のいい活発な福山市になつたらいいと思っておりますので、ひと役買つていただきたいと思います。

それから、先ほど大切なことを忘れていたのですが、社員の中には（子どもが福山大学に入学している）親御さんが何人もおりまして、福山大学の感想を聞きますと、福山大学ではきめ細かいアンケート調査、きめ細かい指導をしていただいており、皆さん概して満足度が非常に高い。どなたからも感謝しているなど、そういう言葉しか出できませんでした。おそらくこれまでにやってこられて事が着実に実を結んで正しかったという実績じゃないかと思いますので、これからもよろしくお願ひします。

井内委員長： 活発な活性化された福山市づくりに商工会議所も手を貸すから一緒にやってくれないかという呼びかけではないかと思います。有難うございました。続きまして、木下委員お願ひします。

木下委員： 地域社会が求める人材育成ということですが、どうしても会社をやっておりますと学生さんが地域にいてということになると、就職ということにこだわっています。大学で学生さんが 4 年間専門知識であったり学問であったり、基礎部分であったり、学ばれること重要なことありますが、それ以上に人間形成の場であると私は思います。私は勝手に今もそう思っておりますし、そういう場であるべきだと思っています。学問の知識ということで、就職面接に福山大学の学生さんも来られて、私どもも感じる事が最近ありました。面接は完璧に行われるのですが、おそらくそういうセミナーやトレーニングを受けてこられて、完成度の高い面接、受け答えを十分にされるのですが、少し変わった変化球を投げたりすると、就職に対する姿勢という根本的なところが非常に弱い学生さんが多いという気がしています。これは福山大学の学生だけではなく、われわれのような小さな会社にもいろんな大学から学生さんが来られて感じるところです。働くということ、職に就くということ、自分がこれからどうやって飯を喰うという根本的なところは世の中が豊かになって、いろんな働き方があって、仕方がないのかもしれません、40 数年前に私たちが就職するときのスタンスと今の学生さんたちのスタンスは大きく違うと感じざるを得ないです。先ほど、“建学の精神”と言いましたが、そういうところがどうしても出てくるのかなと思います。知識、学問だけでなく背骨の部分がしっかりとして、人間として魅力ある全人教育をして鍛えていただいて、就職という観点からいえば、なぜ就職しないといけないのか、自分がどうあるべきなのか、そういうことを学べる場であつてほしいと思っております。

井内委員長： 就職面接のときに変化球を投げると戸惑ってしまう若い人が多い。福山大学の学生だけのことではないと思います。その部分を何とかカバー出来るような教育ができるといいと思いますね、それでは古前先生に高校の立場から、研究だとか、難しい話になるかもしれません、ご意見をいただきましょう。

古前委員： 高等学校から福山大学の学生さんに何かを求めるという話にはなりませんが、今の企業の社長さんの話を聞いてみて、高校の時から今の子供たちはそうなのですが、打たれ弱いですし、結構あきらめ易い。困難にぶち当たったらすぐにあきらめる。そうではない子もいますが、傾向はそうです。割とあっさりしている。なるべくしんどいことは避ける。勉強もそうなのですけれども、勉強をガリガリやらない。高等学校でも鞭を入れてアレやれ、コレやれという学校は傾向として結構はやらない。なぜそこまでやらないといけないのか、保護者もそうですけれども。子どもたちもそういう逞しさというかどうかわかりませんが、みんな素直でいいのですけれども、何かちょっと足りないところがあることは確かですね。高校でもそうですので、そういう子どもたちが入っている大学でもそうだと思いませんが、そこをどう変えるかということが大学の役割だと思います。“建学の精神”にもあるように、そういった人材を育てるという骨子を掲げて大学教育に全学を挙げて進められたらば、子どもたちが 100%それに沿つたものになるのでもないが、建学の精神に沿った学生が年々育っていくに違いないと私は思っていますので、大学のご努力にすがるしかないと思います。やはり、私が大学生に求めたいのは、高校の立場から見ても、主体的に自律的に学ぶ人であってほしいと思っています。高校でもそれも挑戦していますが時間的にも技術的にも難しいのですけれども。言われなくとも自分できちんと課題を見つけて取組んでいけるような。大学では学部が決まっているので、好きなことに打ち込めるはずです。高校時代のように英語・国語・数学・社会・理科をやらなくてもよいのですから。経済学なら経済学、経済学の中の何かに打ち込むといったような、自分から学びに向かっていくような学生が増えて、知的にもレベルが高い方がよいのですが、自分から行動を起こして何かを変えてみたようなことですね。さっき、言われていたような、変化球に弱い、何か自分で計画したときに失敗したとか、痛い目に合っていないのだと思います。実際、いろんなことをやってみないと壁に当たることもないし、この壁をどうやって乗り越えようかということ、工夫することもない訳です。自らの体を使って海外へボランティアに出かけるのでも何でもいいと思います。そういった行動を起こせるような、その意味でも主体的、自律的に学ぶということを一つの柱に掲げて福山大学が取組んでおられると思いますので、地域での貢献活動もその一つだと思いますけれど、それを続けられれば、きっと人材は育っていく、実際そういう大学であると期待しますし、私は思っております。高校でも大学に入ってから果敢に挑戦できるそういうベースを持った子どもを 1 人でも多く育てて卒業させてていきたい、そういう気持ちで取組みたいと考えています。

ちなみに高校では、ただ大学に行きたいから勉強するというのはいつか限界が来る。伸びなくなったら時にすぐあきらめる。志望校を下げるとかいろいろあります。私は高校長になって 7 年目ですけれど、高校生を見ていて高校で何が足りないかというと、高校生がなぜ学ぶのか、なぜ数学を学ぶのか、なぜ高校で毎日勉強しているのか、そのベース、前提となる自分はどう生きていくのか、ということを考えていなさいです。私達もそんな風に考えろと言われたことはありませんけれども、そういう部分を高校は作り直す必要がある。自分はどう生きるか。その中から、それまでの自分の生活や人生を振り返ることがあるでしょう。こうありたいと思うことがあるでしょう。そういう時に、こういう力を身につけたいと思うこと

もあるでしょう。そこを高校では、子どもたちに 1 年生の時から掘り下げさせたい。答えが出ないかもしれませんし、大学に引き継ぐことになるかもしれませんけれども、高校でも子どもを育てる努力をしているということをお話して、大学には人材育成をしっかりお願いしたい。自分で立ち向かって行く、人と違ったことを平気で出来る、あいつは変人か？といわれても平気でいられる。私は私の人生を生きる。ドンドン打って出てゆくような気概のある人材を育っていくといいと思っています。

井内委員長： 高校の校長先生から見れば、子どもが自分はどう生きるか、突き詰めたことが無いのか、そういうところが感じられるとすると、大学に入ってからも大変ですよね。どう指導していいのか、「君は何を目指して大学に入って来たのか」と聞いても何も出てこないようでは困るわけですね。そういう学生たちをいかに鍛えるか、目覚めさせるか、これが大学の役割かと思いますが、難しいというのが現状ではないか、そのまま就職させてしまうと、やっぱり経済界の方が「何をやっているのだ、大学は！」と怒られることになる。苦労が多いですね。それでは次は市民局の小葉竹委員からお願いします。

小葉竹委員： 私が申し上げるのは、おこがましいのですが、大学の方で掲げていらっしゃるアドミッション・ポリシーの中に、社会人としての心構えからさまざまな事が書かれているのですが、その中でこれは私見にはなるのですけれども、今感じているのが若い方が二極化しているのかな、という思いがあります。例えば、われわれが若い頃よりもはるかに例えればワークショップなどしたときに、発言能力であるとか、そういったものがすごく高くなっている。色々なことを考えて発言する能力があるかどうか、実行力があるかどうかはその後になりますけれど、逆にもう一極の方は、自分中心で外とはなかなかコミュニケーションが取りづらい子どももたくさんいる。そのあたりが個性といえば個性ですが、以前に較べれば二極化しているのかなと思います。それはそれとしてそれぞれの良いところと悪いところがありますが、そこをどういうふうに社会に通じるようにしていくかという難しい話になると思うますが、そこが大事なのかなという気がしています。

実際、先ほど出たボランティア活動なんかについて見ても、どういう形で参加いただいているのか、私は見たことが無いのですが、一部の学生に偏っていないかとか、友達に誘われて、そこからどんどん発展していく、それでいいのだと思いますね。後は社会に出て同じ人間ばかりいてもしようがないと思います。それぞれいろんな多様性を大事にして生きていける社会をつくっていかなければいけないと思いますし、そういった意味で、大学だけでなく社会全体で、子どもたちを育てていく必要があると思います。それともう 1 つは、今の時代に何が必要な能力なのか、知識なのか、そこは学生に考えていただきたいと思います。例えばデジタル化。これはこれから絶対に必要になってきますので、そのあたりの勉強をしている子と、していない子では、社会に出た後で大きな差がでてくると思いますので、今の世の中の動き、これから社会情勢を考えながら勉強していくことが大事なのかと思いました。

井内委員長： どうも有難うございました。なかなか難しいところを随分ご指摘になっていると思います。次に教育委員会から佐藤委員にお願いします。

佐藤委員： 他の委員さんが言われたので、私からも重ねて同じようなことを言うかもしれません、職業、仕事をするということについての考え方をしっかり身に付ける。これは大学だけの役割ではない。む

しろ、義務教育段階で 1 回考えさせるといった取組をしていかなければならないと思いました。各企業にお願いして、チャレンジウィークなどを充実させなければいけません。今、チャレンジウィークをする中で、子どもたちには行く前にはお客様ではなく、終わったらそれを振り返る、それをどう改善していくかということも考えさせる。「させる」という表現は言葉として語弊があるかもしれません。企業の方から言われるのは、「強く言つたらへこたれてしまう」という声があるところです。

いま、“福山 100NEN 教育”ということで市政施行 100 年周年の時に、これから 100 年を見据えて教育をやっていくことで走っています。持続可能な発展のための教育 ESD (Education for Sustainable Development) の 2 つの観点でそれを中心に取組んでいます。その中で、人格の発達、自立心、判断力、責任感などの人間性を育むということと、他人や社会、自然環境との関係性を認識し関わり、繋がりを尊重できる資質。この 2 つですが、こうした人材を作っていくため、小中一貫 9 年間を通して、義務教育を進めていく。しっかりと意図をもった上で高校・大学へと進むことが地域社会を支える人材育成につながると思っています。子どもたちが段階を追って発達していく中で、基礎をしっかりと義務教育段階で築いていくことが役割だと思っています。人材育成を当大学でもしっかりとつなげていけるように連携していかなければと思います。

井内委員長： 有難うございました。私も広島市教育委員会に所属しております、小・中学校の教育で何を柱にするのかということをいつも話すのですが、今、福山でお考えになっていることとほとんど同じようなことが意見として出るのです。これからは多様化の時代に入るから多様な人材を育成しろというのですね。その 1 つがグローバル人材育成のことを県知事はおっしゃるのですけれども、そのために一所懸命に英語で授業をしたり、英語で教育をしたりする。私は英語を喋れる人がグローバルな人材だとは思わないのです。というのは、言葉をしゃべる力とその人が内にもっている力は全然違うと思っています。福山大学では留学生をかなり受け入れておられるし、外へ出すこともやっておられる。こういうことはすごく大事で、それが多様化を生んでいく。つまり、自分と生活環境も育った環境も全く違うほかの人たちと直に接して、親睦してものの考え方を話し合う体験が無ければ多様な人材にはなれない。国際的という視野で見た時の多様的な人材にはなれない。そういう気がして、そういう仕事もさせていただいてきたのです。それと、本当の意味での教養が必要だと思います。

(広島大学在職時に) 大塚先生とも話したことがあるのですけれども、広島大学の教養教育を変えようとした時に何をしたかというと、最初に「教養ゼミ」というのをつくりました。福山大学にも「教養ゼミ」があるのを見て、広がってよかったですと思いました。そこで何をしたかというと彼らが自分で話を組み立ててきて、10 人ぐらいのメンバーの中で話をして、それを組立てて理解させてということをやらせて、学生同士のアクティビティーの中にできるだけ教員は関与しないようにして、ただ見守るだけにしようという約束で始めました。教員はレクチャーしたがるのですが、そうではなくて彼らが持っている能力を最大限發揮できるような機会を与えるという意味で、いろんな本を読んだり、色々なものを調べたり、まさにそれが身に付いた教養だと思うのです。そして 3 点目は、今の大學生、私もそれを担ってきて今さらそれを言うのは何ですが、とにかくカリキュラムを詰めすぎるので、すごく大学生が忙しい、すごく忙しいのです。自分が思っているのは、大学生というのはもっと時間的な余裕があつていろんなことができる。その意味で多様な体験をして、多様な考え方触れ、多様な行動をとり、その中で育つていくのが大学生であろう。それをうまく導くのが教員の力であろうと思うのです。

どうしても今、資格社会で、4年間の間でこういうものを身に付けさせて資格を取らせて卒業させないといけない。それが就職に響くからとか、それが大学の評価に響くからとか、ということばかり意識しそうるから、本当に中途半端な大学生ができてしまうのではないかと。本当に多様で自由に活力のある主体的な人を育てようと思ったら、教養と言っても自分の好きなことをやらせることが前提ですけれども、それを実行できる時間を与えることが、大学の役割としてすごく重要だと私は思っています。自分の体験に照らして、私が大学生の時にまじめではなかったのでそのように思っているのかかもしれませんけれども。教えられることよりも自分が求めていることの方がよっぽど力になるということ、皆さん思っていらっしゃることで、強制的にやらせられたことは身に付かないということはご存知だと思うのですけれど、どうしても大学の先生は責任感の上でそういうことをやってしまう。そんなことがある意味で地域社会があまり求めないような人材をわれわれが出しているのではないか。学生に社会連携活動とか社会貢献活動をもっともっとやらせてやるためにには、時間を与えてやらなければいけないです。先ほど興動館などの広島の大学の話をしましたけれど、そういったことも時間があるからこそできると思います。教職員の方もとにかく忙しい。先生方が忙しいのはよく分かっています。あれをしろ、これをしろ、計画しろと、そういうことに追われていて本当に先生たちが生き生きとやりたいことをやっているのだろうか。そのことがうまく学生に伝わっているのだろうか。そういう先生になりたいと思って、憧れの存在であるだろうという視点が、何を言うより、見せること、それを実際に自分の肌で感じることが学生を伸ばすことではないかというような気がしています。

研究開発ということは、先生方がそういう時間を持てば出来るでしょう。話があちらこちらに行きましたが、大学の在りようというものは、本来、ある一定のものを得るため、資格を取るためというのも一部にはあると思います。医学部などはその最たるものかもしれません、本当はそうではなく、勉強したいことがあって集まった人たちに、指導してやろうという人がそこに居ついて、建物がなくても研究施設が無くともやっていけるのが大学だったのが、あまりにも形にとらわれて、本来の大学のもつている意味が薄れて、専門学校になって面白くないなど、自分はこういう年になったから言えるのかもしれません。勝手なことを言いましたけれども、時間が押しています。

最後の「福山大学の3つのポリシー」について、今までの議論を踏まえて、「ここがいいね」とか、「ここをこうした方がいい」という意見をいただければと思います。また、柿原委員からお願いします。

柿原委員：この間、送っていただいた資料を見ていますが、大学の3つのポリシーに対して、私がとやかくいう立場でもありません。これ（現在の3つのポリシー）を基軸に意見を述べたいと思います。送っていただいた冊子（福山大学 大学案内2021）の表紙に“未来創造人”という非常に素晴らしいことばを見つけることができまして、これはおそらく大学のポリシーの中で未来を創る人間を育てようというような強い意志を感じた訳であります。

もう2020年で、われわれ20世紀の人が夢見ていた21世紀、どんな素晴らしい世紀かと思っていた21世紀ですが、それも5分の1が終わってしまいまして、月に行ったり、火星に行ったり、車で空を飛ぶ予定だったのですが、どうも間に合いそうもない。ぜひ、今の若い人たちが新しい未来を造っていただいて、そういう夢を実現できるように、これからもご指導いただきたいと思います。

井内委員長：現役の大学人でないと、アドミッション・ポリシーとかカリキュラム・ポリシーとか分か

りにくいですが、どんな視点でも結構です。次は木下委員からお願ひします。

木下委員： 3つのポリシーについては、私が言うことではございません。先ほど柿原委員が言われたように、21世紀がもう20年過ぎたのだなあ、ということは若い人がこれからどんどん前面に出るような、尻すくみではなくて、何事にも。今はコロナ禍でありますが、明るい未来が絶対あるのだよ、自分らで造るのだよというようなところを、ポリシーに掲げていただければと思います。

井内委員長： 有難うございました。次は、古前先生どうぞ。

古前委員： 今、高校でもスクール・ポリシーを掲げよ、と言われています。中学生に分かってもらわなければいけないので、よその学校と同じではつまらないで、うちはこうですよ、嘘は書けないし、学校の特色があるのです、うちらしいものをどうやって打ち出せるか。これは来年3月末までに県教委に出さないといけないということがあります。いいものだと思います、スクール・ポリシー。3つのポリシーの中で、今のディプロマ・ポリシー、卒業するときに身に付けている姿、2番はいいですね、私は内容的にこれが好きです。地域社会に貢献する実践力。私がお願いしたいことは、高校にとってはアドミッション・ポリシーがとっても大事です。高校生から見て、分かり易いのがいいと思います。読まないといけないのですが、パン、パン、パンと、どんな高校生を求めているのかわかるし、分かり易い。むかし、「学力より人間力」というTVコマーシャルを福山大学がしていましたけれど、そこまでシンプルなのがいいのかどうか分かりませんけれども、ああいう分かり易いものにすると高校生は動くかなと思います。

井内委員長： 有難うございました。それでは小葉竹委員、お願ひします。

小葉竹委員： 福山市で注目していることにSDGsがございます。これをどうにかして官民でやっていきたいと、ようやく腰を上げたところです。民間企業の方もSDGsの目標達成のために、かなりの市場規模があると言われています。実は福山市でやっている福山未来共創塾の中でもSDGsを取り上げてZoom会議をしたのです。そうすると300人くらいの方が来られて、これまで街づくりの関係の方が多かったのですが、民間企業の方、NPOの方がたくさん参加いただきまして、今後こういったことも関係してくるのかと思います。大学という高等教育をされるところも牽引される機関になります。大学ホームページを見させていただいて、SDGsの考え方について取組んでいらっしゃるというのは、もちろん知っているのですけれど、福山市ではこういうことをやっています、ということをご紹介しておきます。

井内委員長： 有難うございました。それでは佐藤委員にお願いします。

佐藤委員： 福山大学の3つのポリシーについて、資料を見させていただいて、なるほど思っているところです。今後の方針ということですけれども、このアドミッション・ポリシーにある「目指すべき人材育成」のところに非常に共感したところです。意見とすれば、これの深化を望むところです。

井内委員長： 有難うございました。私は、ディプロマ・ポリシーの中に「知識、技能、態度を活用して」

と書いてあってたいへん感激したのです。カリキュラム作成や医学教育の中で、この3つをバランスよく入れるのはなかなか難しいですね。何しろ知識偏重になってしまって、態度とは一体何なのだろう、それは広く言えば人間であることすべてなのですけれど、具体的に言えば、患者さんや同僚の医療従事者にどういう接し方をするのか、これをやらなければいけないといのを、そのとき気付きました。それまでには、頭が良くて、腕のいい医者がいいじゃないか、という程度のことしか考えていなかったところに、こういう態度が入ったときに、頭を打たれたような気がしました。別に医学部でなくても、本学には薬学部もありますけれど、薬学部でもバランスのとれた全人教育をやるというのは全く大賛成です。このディプロマ・ポリシーに対しては非常に共感いたします。

カリキュラム・ポリシーについては、これは誰に見せるのか、高校生がこれを見てわかるのか、というとなかなかこれは難しいので、高校生あたりに、この大学は・・・という、もう少し噛み碎いた表現をしていかれたらどうか、学内ではこのポリシーはものすごく大切で要点を抑えてあると思うのですが、私の意見です。

アドミッション・ポリシーも難しいですね。私も医学部で作ったことがあるのですが、どんな人に入つてほしいか、というのを高校生にもわかるような形で書いたような気がするのですが、いま、頭に出で来なくて申し訳ないのですけれど。入学者受け入れの方針というのは本当に大事で、思いは十分だと思うのですが、これが果たして高校生に伝わるのかということも考えて、見直していただければ高校生にとって有難いかという気がしました。

アセスメント・ポリシーというのが最近加わったということをお伺いしたのですが、これはもう難しくて、私もこのポリシーを作ったことはございません。高校生あたりにはアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーで十分でしょう。非常によく練られたというか、つくられたというか、歴史と伝統の中で、皆さんでご検討なさった内容だと思いますので、これに従って素晴らしい教育をやっていただければと感じたところです。だいたい、時間が来ていると思います。

山 本：いろいろなご意見をいただいておりますので、まとめるのは難しいですね。

井内委員長：いろいろな意見がありましたので、また後で項目ごとに整理ができるのであればそうしていただいた方がいいと思います。

山 本：有難うございました。それでは、各学部長、教務委員長、学生委員長等が出席しておりますが、この際ですので、大学側から評価員の皆様にご意見をいただきたいことなどございませんか？研究担当の仲嶋学長補佐から手が挙がっております。仲嶋先生、どうぞ。

仲 嶋：研究担当しております仲嶋です。柿原様から連携、交流をしてほしいというご意見をいただきました。これは社会連携センターの業務かもしれません、我々も研究成果をどのように生かしていくのか、交流していくのか、という点で非常に悩んでいるところです。年に一度研究成果発表会というのをさせていただいているのですが、なかなかお越しいただけない。どういう風にしたらもっと交流ができるだろうかと頭を悩ませているところです。産業界の方からこんなことをしたらどうかという具体的なご意見をいただければ、大変幸いです。

柿原委員： 私にはアイデアがあるのですが、会議所の決定としてここで発表することはできませんので、のちほどご相談させてください。

仲 嶋： 有難うございます。

山 本： いいお話を伺えるかもしれませんね。その他に何かございますか？特に無いようでございます。予定の時間が来ておりますので、このあと、ご意見等を個人的にも伺っていただければと思います。それでは、限られた時間ではありましたが、本日はどうも有難うございました。最後に学長、松田から謝辞を申し上げます。

松田学長： 本日は本当にお忙しい中をおいでいただきまして、また貴重なご意見をたくさんいただきました。私も結構長く学長を務めてまいりまして、もう打つ手もだいぶん無くなってきたのですが、今日のお話を参考にさせていただきまして、また次につなげていきたいと思います。今後とも福山大学のことをお見捨てなく、よろしくお願ひします。有難うございました。

山 本： それでは福山大学外部評価委員会を以上で終了とさせていただきます。有難うございました。

(5) 外部評価員からいただいた意見、提言の要約

外部評価員の皆様からのご意見、提言の要約

この度の福山大学全学外部評価委員会において、外部評価員の方々よりいただいたご意見、ご提言を① 福山大学のイメージ、② 福山大学の教育活動、③ 福山大学の社会連携活動（高大連携を含む）、④ 福山大学の広報活動、⑤ 福山大学の三つのポリシー、及び⑥ 福山大学の自己点検評価活動、の 6 つの項目に整理してまとめた。外部評価員の方々のご発言の主旨を要約し、主語や目的語などを補っているため発言通りではない。

① 福山大学のイメージについて

- ・広島市などの地域では、福山大学は全く知られていない。
- ・福山大学に対するイメージは地元でも明確でない。
- ・福山大学の建学の精神や教育理念は全く知られていない。
- ・福山大学はどんなイメージですか、と尋ねても何も出てこない。
- ・福山大学のイメージは十分に理解されていない。
- ・福山大学の研究等を分かりやすく地域の子どもたちや一般の方に伝えて、身近に感じられるようになることが大切。それが、福山大学のイメージ形成につながる。
- ・三蔵五訓や全人教育という福山大学の精神を知らなかった。これを外に向けてアピールして、福山大学の存在を明確にする必要がある。
- ・在籍学生の保証人の福山大学の教育等に対する満足度は非常に高い。

- ・全国から多数の大学生が福山大学に来ており、福山大学は若者をこの地域に集めるダムのような役割を果たしている。

② 福山大学の教育活動について

- ・今の大大学教育はカリキュラムを詰めすぎるので、大学生はすごく忙しい。大学生はもっと時間的な余裕があつてこそいろいろなことができる。
- ・多様な体験をして、多様な考え方触れ、多様な行動をとり、その中で育っていくのが大学生である。
- ・社会連携活動や社会貢献活動に取り組む時間を学生に与える必要がある。
- ・福山大学はかなりの留学生を受け入れる一方、在学生を海外へ出している。生活環境や育った環境が全く違う人たちと接する体験を通した人材育成が必要。
- ・地域社会を支える人材育成に努力してほしい。
- ・専門知識や技術だけでなく、社会性を培ってほしい。
- ・本当の意味での教養が必要。
- ・世の中の動きや社会情勢を考えながら、今の時代に必要な能力や知識（例えばデジタル化等）を勉強していくことが大切。
- ・SDGsの考え方を、今以上に大学の活動にも取り入れてほしい。
- ・素直でいいが、何か物足りなさを感じる学生をどう変えるかということが大学の役割。

③ 福山大学の社会連携活動（高大連携を含む）について

- ・地域社会の活動への福山大学教職員・学生が参加を、さらに活性化してほしい。
- ・福山市域の多文化共生を進めていく上で、留学生が在学する福山大学にいろいろな知見を教えてほしい。また、逆に福山市が出来ることを教えてほしい。
- ・現状では、大学に対して敷居が高いと感じている地域企業がある。大学と地域企業の連携にさらに取組んでほしい。
- ・地域企業に就職する卒業生が多い。さらにアクティブな人材を育成して地域企業で活躍してほしい。
- ・人格の発達、自立心、判断力、責任感などの人間性を育み、他人や社会、自然環境との関係性を認識し、関わり、繋がりを尊重できる人材を地域の小中高と大学が連携して育成していければよい。
- ・高校側は、大学教員と共に学ぶことを中心に交流を充実させることを希望している。高等学校と大学での“学び”をテーマとして高大連携を図ってほしい。

④ 福山大学の広報活動について

- ・私立大学にとってイメージづくり、ブランドづくりは大切である。面白い取組を大学のブランドイメージにつなげる必要がある。
- ・素晴らしいことをしているのに、大学からの情報発信が不足している。
- ・福山大学のイメージは十分に理解されていない。面白い取組をしているのだから、福山大学

の特徴を社会や受験生にアピールする必要がある。

- ・地域の大学として、大学の理念をアピールして存在感を示す努力が必要。

⑤ 福山大学の三つのポリシーについて

- ・高校にとってアドミッション・ポリシーは大切であり、高校生から見てシンプルで分かりやすいものにする必要がある。
- ・大学において大切なカリキュラム・ポリシーは要点を抑えてある。しかし、読む人を想定して噛み砕いた表現にすることも必要。
- ・福山大学のカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーは共感できる内容であるが、社会一般や高校生には理解しがたい部分がある。分かりやすい表現に改めることを勧めたい。

⑥ 福山大学の自己点検評価活動について

- ・学部等の自己点検評価結果を点数化し、その平均値を大学全体の評価としているが、数値だけでなく、学部等や教員のニーズや思いを反映する努力が必要である。
- ・学生関連の点検は教員側の立場であって、受益者である学生の立場での点検を心がけてほしい。
- ・設定する年度目標の妥当性とその標準化を工夫する必要がある。年度目標が定量的または定性的に設定されているのかを、明確にすることが望ましい。
- ・年度目標の達成度の変化を年度ごとに比較しているが、年度目標を変更したときは数値を単純に年度比較することはできない。この点を改善する必要がある。

おわりに

大学の質保証確保を目的として、平成 16(2004) 年度から全ての大学、短期大学、高等専門学校は、7 年以内ごとに文部科学大臣が認証する評価機関の評価を受けることが法律で義務付けられています。しかし、平成 28 (2016) 年 3 月に中央教育審議会大学分科会がまとめた「認証評価制度の充実に向けて（審議まとめ）」では、この認証評価制度は法令適合性等の外形的なものが多く、教育研究活動の質的改善を促すものになっていないことを指摘しています。福山大学は内部質保証の確実な履行を目的として、平成 26 (2014) 年 4 月に福山大学自己点検評価規程を定め、内部質保証に資する自己点検評価活動を展開してきました。同規程では、5 つの学部及び全学が学外の有識者の方々から評価をいただく外部評価の実施を規定しています。5 学部の外部評価は第 2 サイクルに入っていますが、全学外部評価は今回が初めての実施となります。この全学外部評価を外形的なものとしないように、外部評価委員の方々には、本学や地域の実情を踏まえて評価いただき、忌憚のないご意見を賜るようにお願いしました。本学の教育活動や社会連携活動を高く評価いただく一方、自己点検評価の在り方や大学広報については改善の余地があるとのご指摘をいただきました。皆様からのご意見を本学の教育研究活動の質的改善、長期ビジョン計画策定につなげる所存です。ご多忙にもかかわらず、全学評価委員会の委員長をお引き受けいただきました井内康輝様はじめ外部評価員の皆様に心より感謝し、お礼を申し上げます。

全学自己点検評価委員会
副委員長 山本 覚